

## 「証拠不十分につき、無罪」

——マックス・フリッシュ『青髭』における「妻殺しの夢」のあと——

中 村 靖 子

### はじめに

マックス・フリッシュMax Frisch (1911-1991)の『青髭—語り物』*Blaubart—Eine Erzählung* (1982)は、1981年に書かれ、1982年2月から3月にかけて『フランクフルター・アルゲマイネ』新聞に連載されたが、これは実質、彼の最後の文学作品となった。「青髭」に関しては、シャルル・ペロー (1628-1703)の童話の一つに『青髭』*La barbe bleue* (1697)があり、グリム童話の初版にも同じタイトルの話が収録されている。いずれも、結婚してまもなく妻を殺し、また別の女性と結婚しては殺すことを繰り返す男の話である。その男は青い髭を生やしていたために「青髭」と呼ばれた。フリッシュの最初の出世作となった『シュティラー』*Stiller* (1954)や、その前年に発表された『リップ・ヴァン・ヴィンクル—放送劇』*Rip van Winkle—Hörspiel* (1953)では、いずれも主人公が「妻を殺した」と主張しており、「妻殺し」の主題は、フリッシュの読者には早くから馴染みのものである。『シュティラー』のシュティラーも『リップ・ヴァン・ヴィンクル』のヴァーデルも別の嫌疑で逮捕され、その拘留をきっかけとして「妻殺し」を主張した。しかし実際には、彼らの妻がそれぞれに生きていることは周知の事実だった。その限り、彼らの主張する「妻殺し」が「刑事事件」として取り上げられることはなかった。

フリッシュの『青髭』の主人公フェリックス・シャートは、結婚と離婚を繰り返してはいるが、自ら「妻殺し」を主張することはない。彼の現在の妻は七番目の妻であるが、その妻がシャートのことを「騎士青髭」とからかったことがあった。ペローの『青髭』では、青髭の過去を暴き、自らは難を逃れてヒロインとなるのが、青髭の七番目の妻だからである。もちろんシャートの妻は、彼の別れた妻たちがみんな健在で暮らしていることを知った上でからかったにすぎない。しかしある日、元妻たちのうちの一人が殺害されて、シャートに容疑がかけられる。彼が逮捕されたとき、「法廷に立つ騎士青髭！」*Ritter Blaubart vor Gericht!*と報道されたのだった。

『シュティラー』でも『リップ・ヴァン・ヴィンクル』でも周囲の人間たちにとって問題なのは主人公たちの逮捕容疑である。主人公たちの主張する「妻殺し」に関する審理は、外的な裁判に併行して起こる、あくまでも内面的なものにすぎない。突然の逮捕と拘留は彼らの日常

生活を暴力的に中断させ、有罪か無罪かが未決定である以上に、社会生活の保留状態は、彼らの内的物語が展開する舞台を提供する。その上に『シュティラー』では、「私はシュティラーではない」と主張する「私」がシュティラーについて三人称で語る。しかもこの「私」がシュティラーであることは、読者には初めから見え透いた事実なのである。この形式によって、シュティラーと妻ユーリカとの関係が複層的に描かれることとなり、「妻を殺した」という言葉が象徴的に意味するものとは何かを、読者は探ることになるのである。

カフカの『訴訟』 *Der Process* (1927) では<sup>1</sup>主人公ヨーゼフ・Kは、理由もわからないままに逮捕され、処刑されてしまう。この「処罰」の重さに鑑みて読者は、彼のこれまでの生涯のなかで罪に相当する何かがあったのではないかと、事後的に探すよう促される。しかし生涯の間にいかなる「罪」も発見されないような人間がそもそもいるだろうか。カフカ以後、法的には罪とはならない「罪」、もしくは「罪意識」がさまざまに構想されることとなったが、中でもフリッシュと同世代のスイスの作家フリードリヒ・デュレンマット Friedrich Dürrenmatt (1921-1990) の『故障』 *Die Panne* (放送劇版1955／散文1956／喜劇1979) は、『シュティラー』と並んで、法廷劇という舞台設定を最大限活かした作品と言える<sup>2</sup>。長い勾留の末、判決が出ると共にシュティラーもヴァーデルも釈放されて物語は終わる。それに対して『青髭』は、シャートが拘留され尋問され続けた十ヶ月ののち、「無罪判決」を受けて釈放されたところから始まるのである。

1 『シュティラー』は、デュレンマットの『故障』と並んで、カフカの『訴訟』を受け継ぐ法廷劇と見なされている [Kohlschmidt: 182]。

2 『故障』は、営業マンであるアルフレート・トラップスが出張先で車が故障したために、偶然宿泊することになった館で経験した話である。その館では主とその友人である隠居老人たちが四人集まり、夕食の間、かつての職業を演じるという。彼らのうち三人は、元判事、元弁護士、元予審判事だった。トラップスは無料で部屋と夕食を提供される代わりに、「被告人」の役割を引き受ける。上等なワインと豪華なごちそうに舌鼓をうちながら、トラップスは自分のこれまでのキャリアを語る。そしてトラップスはかつて、自分の上司の夫人と不倫関係にあったこと、その上司はそれを知ったとき、心臓発作を起こして死んだこと、彼はその上司のポストを引き継いで現在の地位にまで出世したことが判明する。前菜、スープ、魚料理、肉料理、そしてデザートという料理のコースに応じてワインが饗され、酔いも昂じてゆく中で会話は展開し、いつの間にか「尋問」の様相を帯び始める。予審判事は上司の死に関してトラップスが有罪であると訴え、弁護士の弁護にも拘わらず、トラップスは自分が罪を犯したと認めてしまう。そして判事は、夕食が出尽くしたあとに、トラップスに死刑判決を下す。そのときになって、ひとりだけ、かつての職業が不明のままだったピレが、元「死刑執行人」だったことが分かる。そのピレに案内されて、トラップスは「死刑囚の部屋」と呼ばれる客間に連れて行かれる。そのあとの結末は、散文と放送劇版と喜劇とではそれぞれ異なっている。散文では、朝になるとトラップスは首を吊って死んでおり、放送劇版では、何ごともなかったかのように、修理された車を運転して家に帰ってゆき、喜劇では、銃で自殺する。

## 「青髭」モチーフの系譜

### ・ペロー (1697)

ペローの童話集は第一部が「韻文による物語」であり、これはそれ以前に個別に発表されていた物語三篇に「序文」を付して1695年に出版された。第二部「過ぎし昔の物語ならびに教訓」が第一部と共に出版されたのが1697年であり、「青髭」は第二部に収録されている。

むかし、町にも田舎にも美しい家があって、金や銀の食器、つづれ織りを張ったベッドや椅子、金びかの四輪馬車をもつ男がいました。けれども、不幸なことに、この男には青ひげがはえていました。そのため、とても醜くとても恐ろしげに見え、どんな女も娘もその前から逃げ出さずにはいませんでした。

隣人のひとりで身分の高い夫人には、非の打ちどころなく美しい二人の娘がいました。男は娘のひとりと結婚したいと申し込み、どちらを選んでくれるかは夫人に任せました。娘たちの方ではどちらも到底その気になれず、青ひげのはえた男などと結婚する決心はつかないからと、互いに押しつけ合うのでした。娘たちにいっそう厭気をおこさせたのは、男がこれまでに何度も結婚していて、しかも、その妻たちがどうなったのかわからないことでした。[Perrault: 182]

娘たちの気を引くために青髭は、娘たちと母親、また近隣の若者たちを招いて、夜ごと宴会を開く。それが功を奏して妹娘が結婚を承諾する。結婚して一ヶ月ほど経った頃、青髭は六週間ほどの旅行に出ることになる。「留守中は大いに楽しんでほしい、仲の良い友達を呼んで、そうしたければ田舎へご案内するように、どこであろうとご馳走を食べるように」[Perrault: 183] と言って、妻に、金貨や銀貨、宝石類の入った金庫の鍵や、家中の部屋を開けられる鍵を渡すが、その中に、奥の小部屋を開ける小さな鍵もあった。「どこへ行ってもよろしいが、しかし、その小部屋だけは入ってはいけない。もしここを開けるようなことになったら、わたしが怒っておまえをどんな目に合わせるかわからないから、固く禁じる」[Perrault: 183]。青髭が出発するやいなや、「この家の贅沢ぶりを見たくて仕方なかった」近所の女たちや友人たちが押しかける。

女たちは、友達であるこの若い妻の幸福をうらやみ、大げさにいい立てて止まないのですが、若い妻のほうは、下の階の小部屋を開けに行きたくてたまらないので、これらの宝の山をみてもすこしも楽しくありません。[Perrault: 184]

「好奇心をしきりにかき立てられた」[Perrault: 184] 妻は、お客たちから離れてひとり禁じら

れた小部屋に向かい、とうとう部屋を開けてしまうのだが、暗さに目が慣れるにつれて、「床一面が凝固した血でおおわれ、数人の死んだ女の体が壁際にくくりつけられているのが、その血の海に映って見えて」[Perrault: 184f.] きた。青髭と結婚した女性たちである。

旅に出た青髭はその晩のうちに帰宅し、翌日には妻が約束を破ったことを知る。殺されそうになった妻は、お祈りのための時間を乞い、その間に駆けつけた兄たちが青髭を殺し、救われる。青髭には一人の跡継ぎもいなかったため、青髭の財産はすべて妻が相続し、そのおかげで二人の兄も姉アンもみな幸せに暮らす。以上がペローの『青髭』である<sup>3</sup>。

童話集第一部の「序文」でペローは、プシューケーの話に言及している。

プシケ [プシューケー] が「心」を意味するぐらいは、私もよく知っています。けれども、このプシケ、すなわち「心」に恋する愛の神をどう理解すればよいのか、私には全くわかりません。いわんや、その先の話、プシケは自分を愛する人、つまり愛の神のことを知らない限り幸福であったはずだが、彼のことを知るようになった瞬間に、非常に不幸になるだろうという点にいたっては、私には不可解な謎です。[Perrault: 10]

この「不可解な謎」は、第二部の青髭にも当てはまる。プシューケーと同様、青髭の妻は、青髭の正体を知らない限り幸福でいられただろう。現に青髭の妻は、結婚を決意するまでには「あごひげがそれほど青くはない、いやこの人はなかなか教養のある紳士なのだ」[Perrault: 182f.] と思い始めていたのである。青髭の妻が青髭の過去を知った瞬間に不幸になったのであれば、その不幸は、秘密の小部屋の存在を知らされたときから用意されていたと言える。この童話の末尾に付せられた「教訓」が示すとおり、この話では、青髭の妻殺しが責められるのではなく、妻（たち）の好奇心こそが戒められているのである [Perrault: 190f.]。この点において青髭が責められるべきは、妻の好奇心をかき立てたことであり、小部屋の鍵を渡してその好奇心を満たす手段まで与えた点にある。青髭は、部屋を開けてはならないと禁じることによって、まさにその中に、彼の秘密が隠されていることを知らせてしまう。その小部屋の鍵を隠しておくか、せめてどの鍵が小部屋の鍵なのかを教えなければ、禁がかくもたやすく破られることもなかっただろう。「少なくとも六週間の間」の予定だった旅行は、突然中断された。「途中で手紙を受けとり、旅の目的であった用件が有利に解決したことがわかった」[Perrault: 185] からである。それではまるで、妻が禁じられた小部屋を開けたために「用件が有利に解決した」かのようなのである。

禁じられた部屋にはいつも秘密の力が隠されている。[……] もちろん禁じる者は、その

3 ヤノーシュの『青髭』は、結婚したいのに青い髭が生えているばかりに、次々と結婚を断られる不幸な男の物語であり、秘密の小部屋も妻殺しもない。

力を知っており、また禁止される者の弱みも承知している。つまり禁じられたものは、明るみにでなければならぬのである。すなわちそれは知られるために禁止されたにすぎないのである。[Barz: 35f./48]

青髭が、部屋を開けることを禁じつつその鍵を渡すことによって妻を試したというのなら、「青髭」モチーフの「教訓」は、人の心を試してはならない、というものでこそあるべきだっただろう。そもそも青髭は、姉妹のうちのどちらかと結婚したいと思いながらどちらにするかという選択は姉妹の母親に任せていた。それは時代の慣行であったにせよ、青髭にとっては結婚すること自体が重要だったのである。こうした青髭の一連の行動は、初めから妻を殺す目的だったというストーリー作りを排除できなくしてしまうのである。

### ・プシューケー

プシューケーの物語は、古くは古代ローマにまで遡る。ペローが挙げるのは、アープレイユス Apuleius (ca. 123-170) の『変身譚』 *Metamorphoses* (別名『黄金の驢馬』 *Asinus Aureus*) である。ここでは巻の4から巻の6に及んで「クピードとプシューケーの物語」が枠物語的に語られる。プシューケーは三人姉妹の末の妹であり、美の神ウェヌス自身のように美しく、人びとに崇められたが、そのためにウェヌスの怒りを買ひ、彼女を妻にしようとする者がいつまでも現れなかった。困り果てた父王はアポロンの託宣を求めた。

高い山の<sup>いただき</sup>嶺に、王よ、その<sup>おとめ</sup>少女を置け、死に行く嫁入りの、<sup>よそお</sup>粧いに飾らせて。また婿としては人間の胤から出た者をでなく、荒々しく凶暴に、蝮みたいな悪い男を待ち設けるがいい。翼をもって虚空を高く<sup>ひぎょう</sup>飛行し歩き、万物を悩まし、焰と剣とをもってすべてのものを痛め弱らせる男、その者をユーピテル大神さえも懼れ、神々も彼には恐れをなし諸川も、<sup>ステュクス</sup>三途の河の暗闇さえも、怖気をふるう男なのだ。[Apuleius: 170f.]

この託宣にしたがってプシューケーは両親と別れ、生い育った国を離れ、ひとり高い山に向かう。そこから風の神に運ばれて辿りついたのが、クピードの館だった。館の主人である夫は夜になると現れ、夜が明けないうちに去ってしまう。プシューケーは夫の正体を知ることもなく、その姿を見ることもなかった。世話をする侍女たちの姿も見えなかったが、何ひとつ不自由はなかった。夫の貌を見ようとしてはならないという禁忌を破らない限り、その幸福は保証されていた [Apuleius: 181]。しかしその幸せぶりを激しく妬んだ二人の姉が、プシューケーに猜疑心を吹き込む。二人は、アポロンの託宣を思い起こさせつつ、夫が姿を見せないのはとてつもない化け物だからに違いなく、危害が加えられる前に相手の正体を突き止めて、殺すように唆す。そしてプシューケーは、姉たちに指示されたとおりに行動して夫の姿を見るのだ

が、それと引き替えに夫クピードを失うのである。

プシューケーにしてもペローの『青髭』と同様、第一の教訓としては、女性の好奇心に対する戒めであろう。しかしプシューケーが青髭の妻ともパンドラとも区別されるのは、プシューケーの場合、その好奇心は、自分が愛し愛される人が何者であるかを知りたいという願いから発している点である。プシューケーのように、セメレーもまた恋人のほんとうの姿を見たいと願った。そしてゼウスは本来の姿で現れ、人間であるセメレーは「荒れ狂う天の雷火」によって焼け焦がれて死んだ [Ovid: 110f.]。一方プシューケーは、愛の神の姿を見たあとでも生きながらえ、クピードを求めて地上をさまよった。そしてウェヌスが与える課題を克服してクピードとの再会を果たし、天上において結ばれた。トマス・ブルフィンチはプシューケーの物語を、単なる好奇心の戒めではなく、地上の愛が天上の愛へと昇華されるプロセスを描いたものとしている。「プシューケー」はギリシア語で「靈魂」と同時に「蝶」を意味する。蝶は、一定のあいだ地上で醜く地を這う生活を営んだあと、一時的な仮死状態を経て、美しく変成して空を舞う。「それは、数々の苦しみや不幸によって清められたあと、このように真の純粋な幸福の喜びを味わうことができる」 [Bulfinch: 169] ことの寓意なのである。ただし「心」というものは、妬みや猜疑心を経験し、好奇心のために何度も愛からそらされそうになりながら、ようやく愛の姿を知るといふことの謂であろう。しかしそれ以上に愛の対象を一度失うという経験がなければ「心」は、自ら愛を求めることを覚えはしなかっただろう。

### ・グリム童話 (1812)

ドイツ文学において「青髭」のモチーフが広く知られるきっかけとなったのは、グリム童話初版である。グリム兄弟による『子供と家庭のための昔話』*Kinder- und Hausmärchen*の第一巻は1812年、第二巻は1815年に出版された。1819年の第二版にはいくつかの話が付け加えられる一方で、削除された話もあり、その削除された一つが『青髭』である<sup>4</sup>。

ある森のなかに男が住んでいました。男には、息子が三人と美しい娘が一人いました。あるとき、六頭立ての金の馬車が、たくさんのお供を引き連れてやってきて、男の家の前に止まり、中から王さまがおりたちました。王さまは男に、娘を妃にしたいと申し込み、男は、娘がこんな幸運に恵まれたのを喜んで、すぐに承知しました。この王さまには、どこといて欠点はなかったのですが、ただ髭が真っ青で、その髭を見るたびに、人はすこしばかりぞっとするのでした。 [Grimm: 465/335]

4 この話が削除されたのは、「あまりにもはっきりとペローの童話に依拠していたため」 [Grimm (Nachweise): 526] と説明されるが、一方で、『赤ずきん』や『いばら姫』など、同様にペローにも見られるにもかかわらず、削除されなかった話もある。

ペローの場合、物語の冒頭では、青髭と結婚した娘には母親と姉しかいなかった——兄たちは最後の救出場面になって初めて言及された——。その母親は「身分の高い夫人」であり、青髭はただ裕福な男の一人にすぎなかった。娘が結婚を承諾する際にも相手に「教養のある」ことが魅力の一つとなった。それに対してグリムの場合、物語は娘以外、父、兄たち、王と男性ばかりで構成される。王である青髭に対して、娘の父親は「森に住む男」にすぎず、両者の間の隔たりは、社会的にも文化的にも格段と広げられている。そして娘は、「その髭が恐ろしくて、結婚する気になれないでいた」[Grimm: 465/335]。にも拘わらず、娘の意思とは関わりなく父親が承諾してしまう。そればかりかこの父親は、いやがる娘を「説き伏せ」さえしたのである [Grimm: 465/335]。ヘルムート・バルツの指摘するとおり、父親から見て青髭は、富と権力を掌中に収めた成功した人間であり、娘の結婚相手を決めるにあたってこの父親はそれ以外の判断基準をもたなかったのである [Barz: 19ff./22ff.]。

結婚してまもなく出かけることになったとき、グリムの青髭は目的も期間の長さも明らかにしなかった。突然帰ってきたことについても説明はない。

「わたしは遠くまで旅に出ねばならない。ここに城じゅうの鍵があるから、おまえにあずけよう。どの部屋をあけて、何を見てもよろしい。ただし、この小さな金の鍵であける部屋だけは、けっしてあけてはいけない。もしあけると、おまえの命がないぞ」[Grimm: 465/336]

結婚して王妃となり何不自由なく暮らしながら、それでも「お妃は、青い髭を見るたびに、ひそかにぞっとせずにはいられなかった」[Grimm: 465/36]。しかしそのことと、王妃が約束を破って部屋を開けることとのあいだには何の因果関係もない。王妃の好奇心は、プシューケーのような愛ゆえのものではなく、誰かに唆されてのことでもない。それは、青髭に対するいかなる嫌悪感とも無縁である。禁じられた部屋で発見された先妻たちの死体は、王妃の「青い髭に対する嫌悪感」を後づけに説明するものではあっただろうが、王妃の行為を弁解するものではないはずである。青髭の最初の妃のときにもやはり秘密の小部屋はあったのだろうか。もしそうならば、そのとき部屋の中には何もなかったはずである。青髭とそれぞれの妻との生活が、その都度妻たちの好奇心によって壊されたのであれば、妻たちこそ禁を破ったことの罪を問われるべきではなかったろうか<sup>5</sup>。

青髭から鍵を受け取ったとき、王妃は、「いわれたとおりにすると約束」した (Sie nahm die Schlüssel, versprach ihm zu gehorchen) [Grimm: 465/336]。その言葉のとおり、王妃は、

5 グリム童話には、類似した話として、第46話「フィッチャーの鳥」Der Fitchersvogelと第73話「人殺し城」Das Mordschlossがあり、後者は『青髭』と同様初版のみの収録である。「人殺し城」はオランダ語からの翻訳となっている。

青髭が出発したあと、城の部屋を次々とあけていき、「世界じゅうから集めたのかと思うほど」の「ありとあらゆるめずらしい品や宝物」を目のあたりにする。見ていないのは禁じられた部屋ばかりとなったとき、改めて、この部屋の鍵だけが黄金でできていることがひときわ王妃の好奇心をかき立てた。

「きつと、いちばん大切な宝がこの部屋にかくしてあるのだわ」

見たいという気持ちがつりの、お妃は落ちつかなくなりました。この部屋の中に何があるのかわかりさえすれば、ほかのものは何も見なくてもいい、と思いました。[Grimm: 465/336f.]

森のなかで育った娘が世界じゅうの宝物を見せられ、この世にはいかに素晴らしく美しいものがあるのかを教えられたあとで、それらのどれよりもすばらしい、「いちばん大切な宝」があることを示される。これまでに見た宝物が富の限りを尽くしたものであればあるほど、そのどれよりもすばらしく高価なものについて、王妃はありとあらゆる推測をめぐらしただろう。それをどの宝物にもまして「いちばん大切な宝」であるように思わせたのは、まだ見ていないという唯一性と否定性であり、まさに「見てはならない」という禁止なのである。これこそが、青髭が命じたとおりに行動した結果なのであり、青髭の指示は、想像をかき立て「見たい」という欲望を触発するプロセスとなったのである<sup>6</sup>。

王妃が禁断の部屋を開けた翌日に王は帰還している。ではやはり、すべては青髭が仕組んだことだったろうか。バルツはこの話を「服従の試練」と捉える説を紹介しつつ、そうした解釈は青髭を「不当に非難する」ことになると反論する [Barz: 37/50]。

既に述べたように、グリムでは娘の周囲に「大人の女性」は不在である。バルツはこの娘を「母のない娘たち」の一人に数えるが、それは実際に母親がいたかどうかではなく、成長期において身近に自分のモデルとするような大人の女性の存在をもたなかったという意味においてそうなのである。こうした少女はえてして「大人の女性」になるのが難しいとバルツは言う [Barz: 18/16]。つまり少女の不幸は、父権的な世界観を相対化するオルターナティブなものをもたないという点にある。実際『青髭』には、プシューケーの場合にそうであったように、猜疑心を吹き込み、策略を授ける「姉たち」も存在しない。逆に言うならば王妃は、誰かに唆されることもなく、初めて自分の意思で夫の言いつけに逆らったのであり、夫の禁を破ったのである。それは、父親のいうとおりに結婚した彼女からすれば、父権的なものに対する初めて

<sup>6</sup> ベローの場合、青髭の妻は、青髭の財宝には目もくれず、彼女の好奇心は初めから禁じられた小部屋だけに向かっていた。「身分の高い夫人の娘」である彼女にとって財宝はすでに珍しいものではなく、唯一「禁じられた」ものだけが好奇心をかき立てたのだった。それに対してグリムの場合、娘はまず、世の中にはどんな財宝があるかを教えられるところから出発する必要がある。財宝のひとつも見たことがないままであったなら、「禁じられたもの」に対する彼女の想像もずいぶん貧困なものに終わっていただろう。



の不服従だったのだ。

もしもその中に禁じられた部屋がなかったとしたら、このお城はまことに退屈な、黄金でできた結婚の檻であったろう。あの禁じられた部屋によってのみ、青髭の妻はヒロインとなることができたのであり、また青髭だけが彼女を唆してこんなにも成長させることができたのである。[Barz: 37/50]

王であり夫である人の権威に逆らった王妃は、間一髪のところを救出され、青髭は、駆けつけた王妃の兄たちによって殺される。兄たちは、妹の身の危険を信じたからこそ、青髭の言い分をきくこともなく青髭を殺したのであり、青髭の殺意を証拠立てるのは王妃の主張しかないにも拘わらず、この殺害は正当防衛と見なされるだろう。先妻たちの遺骸は青髭の殺意を傍証しただろう。これらすべては、禁断の部屋をあけたことから開かれた新しい未来なのである。かくして王妃は、気味の悪い存在であった夫を合法的に葬り、その財産も獲得して幸せな生活のスタートを切るのである。

#### ・『ウルリヒとエンヒェン』(1778/79)

グリム童話の『青髭』に付された注釈は、類似の主題を扱った民謡として、『ウルリヒとエンヒェン』Ulrich und Ännchen を挙げている<sup>7</sup>。これはヘルダー(1744-1803)が収集した『民謡』*Volkslieder* (1778/79)に収録された一つである<sup>8</sup>。

あるときウルリヒは馬に乗って出かけた  
 愛しいエンヒェンの家の前までやってきた  
 愛しいエンヒェン、一緒に緑の森へ行かないか?  
 君に鳥の歌を教えてあげよう

馬に乗ったウルリヒは、エンヒェンを森に誘う。森に着いて馬から下り、ウルリヒがエンヒェンの膝に頭を載せたとき、エンヒェンの涙が伝い落ちる。何故泣くのか、僕は君にとってはあまり魅力的ではないのかと尋ねるウルリヒに対して、エンヒェンは、「向こうのもみの木に、十一人の女の人が吊り下がっているのを見たから」と答える。

7 注釈はヘルダーの『民謡』第一巻の79番とブレンターノとアルニム編集の『少年の魔法の角笛』*Des Knaben Wunderhorn* (1805)第一巻の274番を挙げているが、後者は出典として前者を挙げており、二つは同一の詩である。

8 ヘルダーがヨーロッパ中から収集した『民謡』は、1778/79年に出版され、1807年には第二版が、『民謡に現れる諸民族の声』*Stimmen der Völker in Liedern*として死後出版された。これは体系的な収集として最初の民謡集である。『ウルリヒとエンヒェン』は1778年出版の第一巻に収録されている。

「ああ、エンヒェン、愛しい僕のエンヒェン、  
すぐに君を十二番目にしてあげるよ！」

殺される前にせめて三回叫ばせてほしいと、エンヒェンはまず父に向かって、次に神に向かって、そして最後に末の兄に向かって叫ぶ。兄たちはそのとき家でワインを飲んでいたが、末の兄が聞きつけ、みんなで森へ急ぐ。兄たちが駆けつけたとき、エンヒェンの姿はなく、ウルリヒの靴は血のように赤くなっていた。

Lieb Ännchen kam ins tiefe Grab,  
Schwager Ulrich auf das hohe Rad,  
Um Ännchen sungen die Engelein,  
Um Ulrich schrien die Raben klein.  
かわいいエンヒェンは深いお墓のなか  
義理の弟ウルリヒは高く車刑にかけられた  
エンヒェンを悼んで天使たちは歌った  
ウルリヒの周りでカラスたちがかすかに叫んだ。

ここでは対句や反復、会話の繰り返しなど、残忍な内容とは裏腹に、軽妙な語り口調で語られる<sup>9</sup>。この民謡には、禁断の部屋もなく禁を破るよう唆す者もないが、ペローの『青髭』との共通点が多い。ウルリヒに付された「義理の弟」という言葉は、少なくとも婚約関係にあったことを示しており、ウルリヒの行為もやはり「妻殺し」と言える。そして男が既に何人もの女性を殺害していること、そして女主人公はまさにその何番目かの犠牲者となりつつあること、その前にお祈りの時間を乞うこと、お祈りの回数が三回であること、兄たちが駆けつけて、男を罰することなどである。禁断の部屋に代わって、場面が突然殺害の場面と化す転回点をなすのは、エンヒェンが女たちの死骸を見たことである。しかしここでエンヒェンの好奇心は問題とならず、「禁を破った懲罰としての死」は成り立たない。にも拘わらずエンヒェンは殺されてしまうのだが、女性の側に殺される理由がなく、また被害者の数が多いことから、ウルリヒはむしろ、青髭の元々のモデルとなったといわれる男爵ジル・ド・レ Gilles de Rais (1404-1440)の逸話<sup>10</sup>に近い。妻（恋人）となるのは誰でもよく、大量に殺害することがこの話

<sup>9</sup> tief と hoch、um の繰り返しと共にエンヒェンと天使の組み合わせに対してウルリヒとカラスというコントラストを浮かび上がらせる点など。

<sup>10</sup> ジル・ド・レはジャンヌ・ダルクの戦友であり、戦争後、多くの少年を拷問にかけて殺害したことで知られる。彼は、イギリスのヘンリー八世と並んで、青髭モチーフを作ったといわれている [Tieck (Redaktion der Erstfassung): 1347]。

を特徴づけている<sup>11</sup>。

・『嫉妬深い少年の歌』(1778/79)

『ウルリヒとエンヒェン』と並んで、青髭と類似のモチーフを扱っていると指摘されるのが、同じくヘルダーの『民謡』に収録された『嫉妬深い少年の歌』Das Lied des eifersüchtigen Knaben である<sup>12</sup>。馬に乗ってやって来た少年が少女に向かって「僕の馬をどこにつなぎ止めたらよいだろう？」と尋ねると、少女は「イチジクの木の下に」と答え、馬から下りてしばらく休むように誘う。しかし少年は、「死ぬほど悲しい」からできないと断る。

彼がポケットから取り出したのは何か？  
ナイフだ、鋭くとがったナイフだ  
彼は恋人の心臓を突いた  
赤い血が彼に向かって噴き出した。

この唐突な振舞いに続いて少年は、少女の指から赤く染まった金の指輪を抜き取り、川に棄てる。少年が「死ぬほど悲しい」原因を作ったのは、その指輪だったのである。

一人の少女が二人の少年を愛するとそんなふうになる。  
ろくなことは滅多にない [...]

この最後の節の語りは、少年がなぜ凶行に及んだのかを事後的に、間接的に説明する。ヘルダー自身はこの「教訓」Moral<sup>13</sup>を、後から付け加えられたものと捉えていた [Herder (Stellenkommentar): 981]。『ウルリヒとエンヒェン』には最後に「教訓」は掲げられず、ウルリヒがエンヒェンを殺す理由は示されなかった。ただウルリヒがこれまでに殺した女性たちの数の多さが、ウルリヒの性向の異常さを物語っていた。それに比べてこの少年は、「死はなんと苦いものだろう！」と慨嘆するとおり、おそらくはこれが初めての恋であり初めての殺人だっただろう。原因として挙げられるのは、少女の側の「不実な愛」であり、少年の側の「情熱」である。少年にとって、愛し愛されるか、さもなくば殺すかという選択が成り立ったのである。

<sup>11</sup> このモチーフは元々男の名前がウーリングであったために「ウーリンガー・モチーフ」といわれ、十六世紀にさまざまなヴァリエーションがあった。

<sup>12</sup> これも『ウルリヒとエンヒェン』同様、『少年の魔法の角笛』に『嫉妬深い少年』Der eifersüchtige Knabe というタイトルで収録されている。

<sup>13</sup> 民謡や民話などでは、最後に語り手がその物語から引き出す「教訓」を述べることが多い。

Es stehen drei Stern' am Himmel,  
 Die geben der Lieb' ihren Schein.  
 空にかかる三つの星は  
 それぞれの光を愛に投げかけている。

この詩の冒頭で言われる「三つの星」は、少女と少年以外にもう一人の存在を暗示して、ペローではお祈りの数として用いられた「三」という数字は、恋の三角関係へと変換される。ヘルダーはこの少女をデズデモーナに比し、黄金の指輪を、オセローの嫉妬を招いたハンカチと見なした〔Herder (Stellenkommentar): 981〕が、この黄金の指輪は、もうひとりの少年を代替的に表している。実際のところはどうかであったにせよ、少女の指にある指輪は、それがなぜあるのか、誰からそれを贈られたのかについて、あらゆる推測を誘発し、「嫉妬」を生み出す元となる。その限り、根拠のない嫉妬のために愛する人を殺すということが起こりうるのである。

「青髭」のモチーフにおいて、妻を殺害する動機として「嫉妬」が挙げられたことはなかった。ウルリヒの連続殺人的な異常心理、ペローにおける「禁断の小部屋」と禁破り、そして「嫉妬」という要素を織りなして、フリッシュの『青髭』は展開するのである<sup>14</sup>。

## フリッシュの『青髭』

### ・形式

「このネクタイに見おぼえはありますか、シャートさん？」とフリッシュの『青髭』は、検事が主人公シャートに発した質問と共に始まる。おそらくその詰問は、シャートが逮捕された直後に発せられたものだろう。そのネクタイは、被害者の女性の首を絞めるのに使われたものである。「提出された法学の専門家の鑑定によれば、これがあなたのネクタイであることは疑いの余地がないのです、シャートさん」という検事の台詞のあと、以下のように続く。

証拠不十分につき、無罪。  
 そんな判決を受けてどうやって生きてゆくのか？  
 わたしは54歳だ。〔Blaubart: 303〕

<sup>14</sup> バルトーク作曲のオペラ『青ひげ公の城』においては、嫉妬するのは女性の側である。禁断の部屋には、青ひげの女性関係の秘密が隠されているのではないかという疑念に駆られて、ユーディットはすべての部屋をあけるよう要求する。「何も尋ねるな」「わたしを愛しておくれ」と乞う青ひげに対し、ユーディットは、親も婚約者も棄てて青ひげの元にやって来たことをたてに、「自分はあなたを愛しているのだから（あなたのすべてを知る権利がある）」と、譲らない。『シュティラー』は当初、『愛という名の下におまえたちはどうしようとするのか』というタイトルが考えられていた。

つまり、検事の質問は既にシャートの回想であり、物語の最初の時点において既にシャートは「無罪判決」を受けているのである。釈放されて十ヶ月ぶりに戻った「日常生活」の中で、拘留されている間に受けたさまざまな尋問を回想し反芻しつつ、それを一人称で綴る形で物語は展開する。検事その人はこの語りの世界に登場せず、ただ尋問する声のみが反復される。そして声の主が明らかにされないために、ときとして質問はシャート自身が発しているかのようである。釈放されて再開された日常生活のなかで、散歩をしているとき、白鳥にえさをやっているとき、ピリヤードをしているとき、日々のあらゆる場面において、シャートは自分を詰問する声を反芻する。十ヶ月の暴力的な中断を経たあとではもはや彼の日常生活が元どおりに回復することはないかのように、シャートの方でもそのための努力をしない。開業医であるシャートの診療所の待合室は、彼の逮捕前は患者であふれていた [Blaubart: 310]。しかし事件が大々的に報道されたあと——裁判では、シャートの現在の妻と元妻たちの六人を含めてシャートの知人友人、単なる顔見知りなど、六十一人の証人が呼び出された [Blaubart: 340] ——、彼が無罪判決を受けたからといって、彼の診察を受けようとする患者はもういない。事件のためにシャートに関するありとあらゆることが報道されていたのだ [Blaubart: 310]。釈放されたあと、法廷でシャートに有利な証言をした人たちにさえシャートはコンタクトをとろうとしない。「無罪判決のあと三週間経ってもまだ私はたった一通の手紙も書いていない」 [Blaubart: 312]。そして「無罪判決が出て三ヶ月後」 [Blaubart: 347]、シャートは診療所を売り払う。誰からも必要とされず、自らも職業を放棄してシャートは、釈放後、むしろ徐々に社会的な関係を断ってゆく。ひとりきりで過ごす彼の日常のなかで、彼を尋問する検事の声と数々の証人たちの声が反響するのだが、それは、ちょうどシュティラーが拘置所でさまざまな証人に引き合わされ過去を突きつけられたように、ファーバーが病院で過去を綴るように [White: 456]、シャートに、検事もいない内的な法廷、自己審問の場を作り出す。「証拠不十分につき、無罪」という判決は、彼が本当に「潔白」であることを保証しない。そうはいつでも実際には判決は、ただ「無罪」とのみ下されたのであり、「証拠不十分」の文言は判決文にはなかった [Blaubart: 380]。読者がそれを知らされるのは、物語の終盤になってからようやくのことである。

—証人としてあなたは、ほんとうのことを、そしてほんとうのことだけを話さなくてはなりません。ご存じのとおり偽証罪は、拘留の罰則か、重い場合には [最長五年の] 禁固刑となります。

陪審裁判はドイツ語で Schwurgericht という。つまり宣誓 Schwur に基づく裁判 Gericht である。新しい証人が証言台に立つたびに宣誓が繰り返されるが、「ほんとうのことを、そしてほんとうのことだけを話さなくてはなりません die Wahrheit zu sagen und nichts als die

Wahrheit」という台詞は、十二回繰り返される。1980年2月、チューリヒでハンス・ケラーという男が殺人容疑で逮捕されたあと、結局は無罪となった。フリッシュは六十八時間に及んだ陪審審理のうち、最初の三時間を除いてすべて傍聴した。「部分的には恐ろしいほど滑稽だった」[Hage: 224]。「証拠不十分につき、無罪をいわたされる。その判決を抱えてどうやって生きてゆくのか？ 我々はみんなそうじゃないのか？」[Hage: 224]<sup>15</sup>。

しばしば私は考えました。そこに座っているのはおそらく犯人だろう、しかし私が陪審員だったら、彼に有罪判決を下すこともまた取えてできないだろう、間接的証拠があるだけなのだから。[Hage: 225]

間接的証拠の総体からひとりの人間の生を再構成することはできないというのが、『シュティラー』の主題のひとつだった。「ほんとうのこと die Wahrheit を書いてください」「紛れもない真実だけ nichts als die schlichte Wahrheit を書いてください」[Stiller: 362/9] と言って弁護士は独房にいるシュティラーにノートとペンを差し入れ、そうして一連の手記が始まったのだった。そして『青髭』は、間接的証拠の総体と判決とのあいだの懸隔について、「尋問の儀式化された形式」(フリッシュ) [Hage: 225] をパロディー化するのである。

#### ・「娼婦殺し」

殺されたロザリンデは、シャートの六番目の妻であり、シャートと離婚したあと、娼婦として生計を立てていた。二月の土曜日の午後、そのロザリンデが殺された。月曜日、診療所に出勤して診察助手からロザリンデが殺されたと聞いたとき、シャートは、絞殺されたのかと聞き返した。なぜとっさにそう聞き返したかという検事の質問に、シャートは「娼婦というのはたいてい絞め殺されるものです」[Blaubart: 304] と答えている。

ドイツ文学における「娼婦殺し」は、近いところではムージルの『特性のない男』のモースブルッガー事件が先例としてあるが、フリッシュ自身の作品にこれを探すならば、『わが名をガンテンバインとしよう』 *Mein Name sei Gantenbein* (1964) (以下『ガンテンバイン』と略記) におけるカミーラ・フーバー殺害事件がある。『ガンテンバイン』は、一人称語りの主体が「私は想像する」を何度も繰り返しては、さまざまなエピソードを語るという仕方で展開する。語られる物語世界に登場する人物としてのガンテンバインは盲人を装っており、それを唯一見破ったのがカミーラ・フーバーだった。

カミーラは、自称「マニキュア師」である。ガンテンバインは、マニキュア師としてのカミーラの唯一の客だった。彼女の化粧や服装から彼女が娼婦であるらしいことが見て取れた

<sup>15</sup> フリッシュとフォルカー・ハーゲとの対談は、1981年8月30日、1982年3月11日と12日と計三回なされており、そのうち二回目の対談は『青髭』が発表された直後である。

が、それらはガンテンバインには、見えないはずのことだった。だからこそカミーラは彼の前では「職業を持った女性 eine berufstätige Frau」「男に依存しない女性 eine unabhängige Frau」「自立した selbständig」女性を演じようとしたのである [Gantenbein: 38/43]。ガンテンバインはそれを理解し、彼女からその役割を奪うまいと心に決めた。「彼女の方で、その代わりに彼に盲人の役割を認めていてくれさえすれば」 [Gantenbein: 38/44]。それが二人の最初の出会いにおける暗黙の契約だった。カミーラには熱烈な求愛者がいたが、社会的な地位のために彼女と結婚することは考えられなかった。やがてカミーラは、別の男と結婚することになり、マニキュア師の仕事も辞めることになった。「あなたが盲目じゃないってことを私、誰にも言わないわ。そのことは信用してちょうだい。でもあなたもここで見たことを誰にも言わないでね」 [Gantenbein: 263/281]。それがカミーラとの最後の「契約」だった [Gantenbein: 263/281]。

カミーラが殺されたのは、結婚前夜である。カーテンの飾り紐を用いた絞殺であり、嫌疑をかけられたのは、例の熱烈な求愛者だった。証人として呼び出されたガンテンバインに対しては、被害者の口からかつて被告人の名前を聞いたことがあるかどうかという質問のみがなされた。盲人である彼に、「問題の夜、問題の時刻に、被告を見なかったか」 [Gantenbein: 277/296] と尋ねるのは明らかに愚問だった。しかしガンテンバインはその夜のその時刻、湖の岸辺で白鳥にえさをやる被告を目撃していたのである。

—関係のもつれによる犯罪であるのは確実です。すでに詳述しましたように、強盗目的の故殺である可能性は考えられません。被害者を生理用ナプキンで窒息させるという犯人の殺害方法は、動機が嫉妬であったことを示しています……。 [Blaubart: 320]

発見されたとき、ロザリンデの遺体は、「ベッドの横の絨毯に横たわっており、着衣のまま、両手は膝に、胸には五本の百合の花が置かれていた」 [Blaubart: 320]。状況証拠からロザリンデ殺害の動機は嫉妬であると予測された。また、被害者の両足が縛られており、抵抗のあとが見られなかったために、顔見知りの犯行と見なされた。そしてロザリンデの部屋の鍵を、少なくとも掃除婦とシャートが持っていたことは判明しており、さらには犯行当日の午前中、シャートは実際ロザリンデのところにいたのである。

フォルカー・ハーゲ あなたの作品ではしばしばそうであるように、またもや嫉妬が大きな役割を演じていますね？

フリッシュ ここではほとんどパロディー気味です。私はもう嫉妬を描くことはできません。それはもう、自己剽窃として現れるしかありませんから。 [Hage: 225]

フリッシュは「自己剽窃」というが、それほど『青髭』には、フリッシュの過去の作品のあらゆる場面、あらゆるエピソードがちりばめられている。犯行推定時刻に湖岸でひとり白鳥にえさをやっていたために、アリバイが証明できないというエピソードは、シャートにも適用された [Blaubart: 308]。これ以外にもフリッシュは、旧作に潜めておいた要素を多分に組み込んでいる<sup>16</sup>——その日シャートがロザリンデのところにいる間電話が何度か鳴ったが、ロザリンデは電話に出なかったこと [Blaubart: 397]、ガンテンバインがカミーラのところにいる間、何度も電話が鳴ったが、カミーラは「番号違いです」と切ったこと [Gantenbein: 160/172]、被告は非常に嫉妬深いこと、そしてさんざんに私的生活を暴露されたあげくに「証拠不十分に突き、無罪」とされたこと、被告は何回もアリバイの主張を変えていること、その一つにフェルデッグ通りが言及されているが [Gantenbein: 278/297]、これはシャートがロザリンデ殺害の日にはたばこを買ったと主張するキオスクのある場所であり、それは犯行現場から遠からぬ場所であること [Blaubart: 309] など——である。

作品間の「剽窃」を俟たずとも、パラフレーズの単位で、エピソードの単位で、あるいは人間関係の単位で、ひとつの作品内でも、「繰り返し」が用いられている。あるいは『ガンテンバイン』では、人生における同じことの繰り返し为主题にもなっている。出会いのあと、またもや恋に落ち、またもや執着してしまうという同じ物語の反復を回避しようとして、主人公たちは結局同じことを繰り返してしまう、というふうな。同様にシャートも元妻たちも、結婚、不倫、そして離婚というプロセスを繰り返していた。したがって、現在の妻に期待される役割は、シャート以外の男性との関係であり、お決まりの「繰り返し」である。ユッタは、シャートが釈放されて十ヶ月ぶりに帰ったというのに迎えに来なかったばかりか、出張先から帰って来ようもしない [Blaubart: 385ff.]。そのことについて問う尋問の声は、シャートが釈放された後である以上、当然検事の声ではありえない。質問に対するユッタの答えからは、彼女が別の男性のために、シャートとの離婚を決意していることが明らかになる。そしてそれを知ったとき、シャートの反応に嫉妬は見られなかった。

離婚のあと、元妻たちとシャートの関係はきわめて友好的なものだった。「わたしたちは友人になったのです」 [Blaubart: 306] と繰り返しシャートは言う。離婚したあと、シャートとロザリンデは定期的に会っていたが、それはロザリンデの客としてではなくあくまでも友人としてであり、税金に関する助言者としてであった。それはなにもロザリンデだけが特別だったわけではなかった。シャートにとって嫉妬とは、結婚という形においてこそ重要となるのだった。

<sup>16</sup> フリッシュとの対談のなかで『青髭』が話題になったとき、ハーゲは、1941年にフリッシュが書いたメモとの連関性を指摘している。その際フリッシュは、全く記憶になかったと述べ、「自分でもしばしば、連続性 die Kontinuität について、相互連関性 die Kohärenz について不思議に思うことがある」と述べている [Hage: 224]。



**・私生活に至るまで厳正であること**

カミラ殺害事件の裁判では、当初、被告が本当に罪を犯したかどうかはほとんど問題にならなかった。それよりも、「そもそもこういう男が嫌疑をかけられたということ自体が、一つのスキャンダルだった」[Gantenbein: 277/296]。捜査が進めば、早晚彼の無実は明らかになるはずだった。しかしその審理の過程で、何年にもわたって彼がカミラに送った膨大な手紙が証拠として提出されたのである。「法廷で読み上げられ、新聞でも報道された彼の手紙は、実のところ非常に美しく、非凡でさえあるのだけれども、印刷されてさえそれは、このある情熱の証明書は、滑稽に見えなかった」[Gantenbein: 277/295]。ときに激しい嫉妬を脅迫的に表現してはいたものの、きわめて私的な、差出人と宛名人だけの秘されるべき愛の手紙が、法廷で、書いた本人の前で読み上げられるという事態、それを、不特定多数の人びとが本人と共に傍聴するという事態が、被告を「葬ってしまった」[Gantenbein: 277/295]。

被告をとくに苦しめているのは、間接証拠の総計でもなく、疑問を残す指紋の鑑定のことでもなく、エレベーターの鍵の一件でもなく、また彼が、彼女の部屋から叫び声が聞こえた十五分間のための絶対確実なアリバイを示すのに苦慮しているという状況ですらない、それは彼の口もとに心ならずもかぶひきつり、彼の神経衰弱、なかんずく彼の手紙が先取りしている繊細な罪の意識、彼の手紙にある自分自身に対するイロニー、いや、指導的人物にとってはやはり神聖であるはずのすべてのものに対するイロニーなのだ。破滅した男、公的には破滅した男、しかしひとつの頭脳、自分の弁護人の弁論をすらあまりに単純だと批評することによってその効果を弱めてしまうほどの頭脳、彼がそういう人間だということ、彼が黙っていてもすぐに見て取れるのだ。[Gantenbein: 276/295f.]

彼の愛の手紙がおよそ滑稽なものではなかったとしても、むしろ才気に富んでさえいて、真摯な愛を証言するものであった分、いっそうそこからは、殺害の動機を否定しようとする弁護人の意図を超えて、「指導的人物」がいかかわしい娼婦への愛におぼれるさまが赤裸々に描き出されただろう。それが思いもかけずさらしものになっていることを、人びとは、ある種の気まぐれと一抹の意地悪な喜びをもって傍聴しただろう。その上に「証拠不十分につき、無罪」[Gantenbein: 278/297f.] という判決を全国民の前で言い渡されたところで、彼の潔白が証明されたことにはならない。むしろ彼が「無罪」となったのは、その地位を慮っての不当な処置ではないかという疑いさえ生じかねない [Gantenbein: 278/297f.]。今彼が被告席でうなだれているのは、彼があればほど執着したカミラを失ったからではない。どんな人間であれ——嫌疑をかけられない限り、そして取り調べを受ける理由をもたない限り——保持することが許されたはずの極私的な領域をこじ開けられ、暴露されてしまったからであり、それによって彼は、「公的に破滅した男」となったのである。

「指導的 *führend*」という言葉が『ガンテンバイン』で使われるのは、もっぱらこのカメラ殺害容疑をかけられた被告に関してであるが、一度だけ、別の個所で使われている。それは、やはりカメラに関わる場面であり、ガンテンバインが初めてカメラに出会ったエピソードのなかである。それは、盲人として最初の外出の際である。今後、盲人としていろんな経験をすると空想する中に以下のような例がある。

彼 [ガンテンバイン] はそこで、まさに文化の自由について話をしたばかりの紳士に出会って、その紳士に問うだろう、ヒトラーの下で同様に指導的役割を果たしていた別の紳士は、同じく今この広間にいるのかどうかを。彼にはそれが同一の紳士であることが見えないだろう。[Gantenbein: 35/40]

ヒトラーの時代、「指導的役割を果たす立場」にしながらスキャンダルを報道されて失脚した事件としては、いわゆる「ブロンベルク-フリッチュ危機」がある。国防相ブロンベルクは、売春歴のある平民の娘<sup>17</sup>との再婚問題で名誉が失墜し、国防相を罷免された。陸軍総司令官フリッチュは伝統的なプロイセン軍人でありヒトラーの側近の一人でもあったがヒトラーの『『政治的遺言』と呼ばれる重大な将来構想<sup>18</sup>に反対したことで疎まれ、のちにホモセクシュアルの疑いをかけられて罷免された。フリッチュはのちに軍事法廷で無罪判決を言い渡されたが、職務には戻されることはなかった<sup>19</sup>。この二人の失脚後、ヒトラーはドイツ軍のナチス化を押し進めていった<sup>20</sup>。

<sup>17</sup> この結婚当時、ブロンベルクは六十歳、相手の女性は二十五歳だった。国防相という地位にありながら、その結婚式は極秘裡に行われ、結婚式のあと夫人は公的な場に顔を出さず、そのため夫人と直接面識のある人はほとんどいなかった。また、結婚が報じられたとき、相手の女性は「グルーン嬢 *Fräulein Gruhn*」としか記されなかったが、これはきわめて異例のことであり、そのためにさまざまな憶測が飛び交った [JanBen/Tobias: 41f.]。新刊のポルノ写真のモデルが「娼婦グルーン」と記されていたことから、新しい国防相夫人と同一視する噂が流れた [JanBen/Tobias: 43f.]。また、ベルリンの娼婦たちの間では新しい国防相夫人は「私たちの仲間だった」という噂があることも報告された [JanBen/Tobias: 45f.]。当時、現役の下士官以上の地位にある者は、結婚の際、「無犯罪証明書」を提出する義務があったが、もしブロンベルクの再婚相手が娼婦などの前歴があれば、その義務を怠ったことになった [JanBen/Tobias: 46]。

<sup>18</sup> 1937年11月5日の午後、ヒトラーは日頃から信頼する六人の側近、ゲーリング、海軍総司令官レーダー、外務大臣フォン・ノイラート男爵、ホスバッハ、フォン・フリッチュとフォン・ブロンベルクを呼んで秘密会議を開いた。「1943年までにドイツは武力によって生活圏を拡張し、オーストリアとチェコスロヴァキアをドイツ領とする」というものだった。ブロンベルクとフリッチュは「軍事的見地からそれに異議を唱えた」 [Höhne: (上) 398]。

<sup>19</sup> フリッチュ事件は、国防軍とSS (Schutzstaffel: ナチス親衛隊) の主導権争いであり、また司法とゲシュタポ (Geheime Staatspolizei 秘密国家警察) の争いでもあった。フリッチュは、「ドイツ保守派の影のホープ、国防軍の独裁の打破をもくろむSSの執行部隊 (VT) の敵」だった [Höhne: (上) 395]。本来ゲシュタポには軍人に対する捜査権がなかったにも拘わらず、陸軍総司令官であるフリッチュは自らゲシュタポの尋問に応じたのだった [Höhne: (上) 409f.]。

<sup>20</sup> ヒトラーは、ブロンベルクの後任の国防大臣を任命せず、自ら国防軍の最高指揮官となった。

一国の指導的階級は、少なくともその最上層においては、その人柄によって代表的人物でなければならぬし、その私生活の厳正さ<sup>21</sup>が他のすべてを覆っていなければならないのだ。さもなかったら、指導は独裁によってしかなされないだろう。

die führende Gesellschaft eines Landes muß wenigstens an ihren Spitzen vertreten sein durch Persönlichkeiten, deren private Korrektheit alles andere deckt; sonst geht die Führung nur noch mit Diktatur. [Gantenbein: 278f./298]

ヴァーデルもシュティラーも、逮捕されることさえなければ、私的な問題を吐露する機会はなかった。しかしそれは、ある意味ありえないほど牧歌的な、平和な想定だった。実際にはたとえ濡れ衣ではあっても、いったん逮捕されてしまえば、犯行を行ったか否かという問題を離れて、私生活のありとあらゆる細部に亘って取り調べられ、衆目に晒され、好奇のネタにされてしまう。その結果、最終的には無実であると証明されたところで、いったん暴露されてしまった私的な領域が回復されることはもはやない。よしんばその領域の最奥にさえ何らやましいことがなかったにせよ、そこにあったのがありきたりで凡庸なものばかりであったにせよ、極私的なものが白日の下にさらされたということが決定的なのだった。

『ガンテンバイン』はカミーラ殺害事件の被告の運命を通して、ナチスの政治的主張よりは、それが内在的に孕んでいる私的な領域への侵犯の危うさを描出する。それに対して『青髭』はその運命を、一人の名もない一般市民の身に置きかえて描く。そうした危険は決して、一国を支配する「指導的な役割」を果たす人たちだけに起こりうる特別なものではないのである。ある日突然、身に覚えのない理由で逮捕されるということは誰にでも起こりうることであり——ちょうどヨーゼフ・Kのように——、ひとたび嫌疑をかけられたならば、有罪か無罪かが判明する以前に、その人の私生活の細部に至るまで聖域なしに蹂躪されるということが、いやしくも法治国家において公然と行われる。「秘密の小部屋」は、愛ゆえの好奇心をかき立てるのでもなく、ひとりきりでこっそりと覗かれるのでもなく、みんなが東になって詮索する対象となり、印刷されて大々的に報道されるものとなり、しかもそれがいかなる禁も犯さずとも合法的に行われるのである<sup>22</sup>。フリッシュ自身が、1948年に開かれた世界平和会議に参加して以降、スイス政府によって私生活を盗聴されていたという事件が明るみになったのは、さらにのちの

<sup>21</sup> フリッシュがこの「厳正さ」Korrektheitという言葉で人の性格を描写する場合には特定の傾向がある。たとえば『シュティラー』の作中この言葉で特質を表現されるのは、シュティラーの弁護士と拘留所の監視長である。「おそらく私を限りなくいらだたせたのは、彼[弁護士]のむら気のなさ、彼の厳正さ、彼の節度であろう。知性という点では彼は私より優れていたが、しかし彼はその知性のすべてをただ、ミスを犯さないう点に注いでいた。こうした人間を私は恐ろしいと思う」[Stiller: 374/21]。

<sup>22</sup> しかしまた、覗くまでもなく暴くまでもなく、私的事柄を自らインターネット上に流す行為がためらいとも羞恥とも無縁の仕方で行われるという現象がある。私的領域と公的領域との境界横断には、もはやいかなる禁忌もなくなったのだろうか。自ら露出する私的領域に、なお誘惑的な秘密はあるだろうか。立木康介の論考は多くの問題提起をはらんでいて刺激的である。

1989年のことである。

### ・「秘密の小部屋」モチーフ

ロザリンデは、シャートと結婚する以前に二回の離婚歴があり、二人が関係を持つようになったのは、ロザリンデはまだ二度目の夫と、シャートは五度目の妻と結婚していた頃である。シャートと離婚する前にもロザリンデは、一年以上にわたって別の男性と関係を持っていた。シャートもそれを知っていた。(さらには、ロザリンデの元夫の証言によれば、ロザリンデはまだ二度目の結婚のあいだ、シャートとは別の男性とも関係を持っていた [Blaubart: 353]。このことをシャートは、裁判で初めて知った。) かくも男性関係が複雑なロザリンデであったが、シャートは言う、「彼女はけっして異常性欲者ではありませんでした」 [Blaubart: 315] と。

この発言はある意味滑稽である。ロザリンデ殺害事件の報道において世間の関心は、誰が犯人であるかという問題以上に、シャートの人生歴に集まり、結果、結婚と離婚を繰り返していたシャートこそが、青髭に擬せられ、「異常性欲者」の疑いをかけられているのである。そのシャートが、被害者を庇って「異常性欲者」でなかったと証言する。あたかも彼自身がそうであるなどということは初めから問題にならないかのように、である。このようにしてフリッシュの『青髭』は、ウルリヒに示された「異常心理 (性欲)」という要素をネガとして描こうとするのである。

シャートによれば、ロザリンデは、陸軍少佐である父親<sup>23</sup>から過度な期待をかけられており、「その結果、彼女はそもそも自分になにかができるとは信じることができなくなってしまっていた。彼女は、女性としてはいつも成果を得ていたが、それは自己確認のために必要だったのだ、と私は思う」 [Blaubart: 315]。「女性としての自己確認」は、もちろん父親の期待とは別種のもだったが [Blaubart: 316]、「自己信頼が欠如していた」 [Blaubart: 315] 彼女にはとにかく必要だった。ロザリンデもまた、父ゆえに「大人の女性」になることに失敗していたのであり、「弱さを抱えた」という点では、シュティラーの妻であるユーリカの変奏でもあるのである<sup>24</sup>。

23 証言台で、ロザリンデの「職業」を知っていたかと問われたとき、ロザリンデの父親は、シャートは医者でありそれなりの収入があるだろうから、離婚したあとも「社会的立場にふさわしく standesgemäß」慰謝料が支払われていると思っていたと答えている [Blaubart: 340]。短い証言のなかで彼はこの「社会的立場にふさわしく」という言葉を二回繰り返している。また彼女の最初の結婚相手は、空軍大尉であり、彼は19歳の彼女を強姦したのだった [Blaubart: 315]。父親も最初の夫も共に軍人であったということは、グリムの青髭と娘の父親とが同じ父権的価値観を共有していたことの変奏と言える。それは「初めから失敗した結婚だった」 [Blaubart: 315]。

24 ユーリカは、「いくらか少年のよう」で「古代ギリシアの青年のよう」に美しい [Stiller: 407f./53] 一方で、「極度の不感症 Frigidität」だといわれている [Stiller: 437/76]。自己表現が欠如していたユーリカは、そのことでシュティラーを苦しめるが、ロルフの目から見てもそれは驚愕するほどだった。

ロザリンド殺害の動機が「嫉妬」と目され、且つシャートの「常軌を逸した嫉妬」は友人たちの間で知れ渡っていた [Blaubart: 305] ために、証人たちに向けられる検事の質問はもっぱら二つの点に焦点が当てられた。第一に、被害者の遺体の上にあった百合の花がどこから持ち込まれたかであり、第二に、シャートの嫉妬深さは、殺人を起こしかねないほど度を過ぎたものであったのか、である。まず百合に関して掃除婦の夫は、シャートが午前中にロザリンドを訪れたとき、百合の花を持っていなかったと証言している [Blaubart: 307]。また庭師は、遺体発見の時点で百合の花があればほど新鮮であったことから、百合の花は当日被害者のところに持ち込まれたとしか考えられないと断言していた [Blaubart: 359]。一方嫉妬に関しては、元妻たちや友人たちがみな、シャートの嫉妬が「根柢のないもの」であり尋常でなかったと次々に証言した。たとえば一度ひどく酔っ払ったときに、「自分はこの女 [ロザリンド] を絞め殺してしまうかもしれない」 [Blaubart: 310] と発言したことがあった。あるときは妻（それはロザリンドではなかったが）に、差出人を示さないままに花を贈り、妻がその花を受け取るさまを観察したりする [Blaubart: 328]。あるいは、発送されたにせよされなかったにせよ、彼が書いた数々の手紙は、「病的な嫉妬と、被害妄想の傾向を示しており、そこからは短絡的な行動がとられる可能性は排除できません」 [Blaubart: 347] と診断された。ロザリンドが誰かと踊っているあいだ病的なほど嫉妬して、ほとんど自制できなかったこともあった [Blaubart: 351]。あるいは、「彼女はクラゲだ。[……] クラゲを絞め殺すことはできない」というメモまで発見された [Blaubart: 351]。

しかしまたその一方で、「ドクター・シャートは、ハエの足一本さえ折ることもできないような人でした」 [Blaubart: 312, 350, 365] という証言も複数の人からなされる。「彼は人を殺すくらいならむしろ自殺したでしょう」 [Blaubart: 324] という証言までである。検事の数々の質問は、憎しみであれ嫉妬であれ、よしんば「殺したい」ほどの激しい感情を容疑者が持っていたとしても、その感情は、実現された行為（犯された犯罪）とは厳密に区別されるべきであるという、きわめて当然の確認へと収斂する。逆に言えばそれは、いかに激しい感情があったにせよ、それを事後的に行為の動機と見なすのは慎むべきだということになる。そしてこれは、

---

彼女はこれまでの生涯の間、一度も愛されたことがないのだろうかと問わずにはいられなくなった。もちろん問いはしなかったが。それに彼女は自分では愛しているのか？ 思わず知らず私は、彼女を子供として見ようとした。彼女が孤児だったということにかかっているのだろうか？ ユーリカ夫人が自分を語り始めるのを、刻一刻と待ちながら、私もまた黙り込んだ。彼女の規則正しい、うつろな息づかいが聞こえた。いったい何がこの人間に起こったのだ？ というのも、ひとりの人間がそもその初めからこんなふうでありうることを、切実な危機の状態にあってさえこんなにも表現を欠いたものでありうることを、私は信じたくなかったからである。誰がいったい彼女をこんなふうにしたのか？ [Stiller: 747/384]

ユーリカとシュティラーとの間に子供は生まれず、ユーリカはフォックスという種類の犬を飼っていた [Stiller: 456/96]。ガンテンバインがカミーラと初めて会ったとき、カミーラの飼っているプードルを見て、盲人であるふりをするガンテンバインはわざと「フォックス・テリア？」と聞いている [Gantenbein: 30f./35]。

カフカの『訴訟』が提起した問題でもあった<sup>25</sup>。

シャートの無罪判決に納得できず、執拗に尋問を続ける検事こそが、固定観念にとらわれていて、偏執狂的にさえ思われてくる。「残念ながらこの件において被害者はハエではないのです」[Blaubart: 314]。「私の無罪判決は、彼[検事]を決して納得させないだろう」[Blaubart: 317]と述べるシャートは、自分でも「罪探し」に夢中になっているかのようである。結婚している間は激しい嫉妬の傾向を示していたシャートが離婚したあととはどの妻とも「友人」であることを理解できない検事は最後の質問を發する、「病的な嫉妬からついに解放されるということが、いったいどうして起こったのです、ドクター？」[Blaubart: 345]

—ビデオです。

—理解できません。

—あなたはビデオを知らないのですか？

—もちろんそれは知っています。

—隠れてこっそりとやったのではありません。それは彼女が思いついたのです。私に、一度隣の部屋に座って——たばこを吸わずに！——彼女が外の男とどうやるのか——しかも、私が見ている瞬間に——を画面で見ると。最初は私も抵抗がありましたが、しかしロザリンデがそれを望んだのです。私を自由にするために。それは重大な経験でした。そのころに私は三回見ました。もちろん毎回別の客でしたが、しかしそれほど違ってもいなかったのです。

—どうしてそれが重大な経験だったのです？

—画面は非常に小さかったのですが、はっきりと見えました。たいていの場合彼女にとってセックスはほとんど意味を持っていませんでした。彼女にとってはせいぜいのところ——彼女が言うには——性交は楽しいと。[……] 本当なら私はとっくにそのことを知ることができたはずでした。私たちが結婚しているときに既に。ロザリンデにとってベッドは、およそ個人的な領域 *kein sehr persönlicher Bezirk* ではなかったのです。[Blaubart: 345f.]

これが、フリッシュの『青髭』がもつ「秘密の部屋」モチーフの変奏である。覗くのは男の側であり、覗きを通して部屋の向こうに見えたものは、殺された元妻たちの遺骸に代わって、

<sup>25</sup> テオドーア・チャルコウスキーによれば、十九世紀後半から二十世紀前半にかけてオーストリア＝ハンガリー二重帝国では、既に時代遅れになった法制度の改革の必要が叫ばれていた。その際二つの法律、ドイツ帝国の法律とオーストリアの法律との齟齬が問題となったが、これはムージルの『特性のない男』のモースブルガー事件においても問題となった点である。チャルコウスキーはこれを、カント以来の伝統にしたがって、「犯された行為」にのみ焦点を当てて罰を決定するのか、もしくは、オーストリア法典のように、その行為を引き起こした「意図」を重視するか、という問題だとしている。

元妻の性交場面だった。しかしこの経験を通してシャートは、よしんば自分以外の男が彼女を「絶頂の状態に持ってゆくことができたとしても、それさえ彼女にとっては、個人的な共感とは何の関係もないものだった」<sup>26</sup>ことを知ったのだった [Blaubart: 346]。

プシューケーは、暗闇の中で姿の見えない恋人に抱かれながら、その姿を見たいと願った。しかし光の下に晒されたとき、クビード（エロース）は去った。それと同様、妻が他の男と一緒にいる場面は、見るできない限り、「推測」をかき立て、嫉妬を引き起こすものだった。しかし、一部始終を目撃して初めて「病的な嫉妬心」から解放されたというとき、背景にあるのはシャート自身の「男性として」の自己信頼の欠如である。作品の終盤になって明らかになるように、ロザリンデは、自分の生は満たされないままに終わるのではないかという不安を抱えていた。それをシャートは知っていた。そしてロザリンデが性的な満足を経験したことがないのは、自分に問題があるとシャートは思い込んでおり、彼女の生をその不安から解放するために、離婚を申し出たのだった。「自分のせいで彼女の生が満たされないままに終わることを欲しなかった」からである [Blaubart: 378]。しかしこの点については、シャートの側だけに問題があったわけではなかったのである。

心の最も奥にある秘密の領域を、性行為から解放することは、初めての結婚が「強姦」によって決定されたロザリンデにとってもまた必要なことだったのだろう。こうした経験を抱えながらロザリンデは、ユリカのように自己防衛的に「不感症」になることはなかった。性交からはいかなる精神的な関係も生じないというロザリンデの考え方は、「強姦された」という経験のあとで、いかにして生きてゆくかという彼女なりの回答を示している。それは、軍人である父親の過度の期待が引き起こした「自己信頼の欠如」を克服してくれるものでは決してなかったにせよ、それをも含めて、父親の期待とは違う仕方で、「己れの弱さを抱えて生きてゆく」<sup>27</sup>すべを身につけたのだと言える。

#### ・「愛するものを殺すとき」

「秘密の小部屋」モチーフに関しては、もう一つのエピソードがある。それはシャートが

<sup>26</sup> ここで「個人的な共感」と訳したのは、persönliche Sympathieである。persönlichは「個人的」という意味でもあるが、「その人自身に関わる」、「人格的な」、という意味かと思うが、直前の独立引用中の「個人的な領域」との関係からこのように訳した。

<sup>27</sup> 「己れの弱さを抱えて生きてゆく」 [Stiller: 588f.] ことは、『シュティラー』の随所で浮かび上がる問題であり、しばしば言われるように「アイデンティティの問題」以上に、この作品の隠れた主題となっている。シュティラーの友人アレックスはホモセクシュアルであることで悩んでいた。「私の教育はすべて、彼を、彼の弱さから引き離すことにありました」 [Stiller: 589] と、アレックスの父親は述べている。アレックスは、「シュティラーは、いかにして自分の弱さを抱えて生きてゆくかを示してくれた」と書き遺して自死した [中村: 323] 参照。ロザリンデの場合にもアレックスの場合にも、弱さを排除することが「父親的」な期待であり教育であったが、それとは違ったふうに生きることが娘や息子たちの課題となっている。それに対してユリカは、そのような父的なものさえ持たなかったのだった。

幼い頃に飼っていたうさぎの思い出である。終盤になって「ロザリンドを愛していた」という発言のあと、シャートの自殺の試みが描かれ、それ以降、証言台に立つのは死者たちの番となる。

—彼のうさぎは何が原因で死んだのですか？

—フェリックスはおいおいと泣きました。

—そのとき、剃刀を見ましたか？

—ええ、ええ。

—それについてどう考えましたか？

—彼はうさぎを解剖したのです、ええ、ええ、彼は私に確かにそう言いました。彼はうさぎがどうして死んだのか、知ろうとしたのです。[Blaubart: 384]

飼っていたうさぎが死んだとき、その死因を知ろうとして死体を解剖したことを、母親は、のちに医者となるシャートの性質を表したものとして肯定的に語る。ここで「解剖」と訳したのは aufmachen であり、開くという意味である。生きていれば開くことのできないものを、開くということ、それは、「本来開けてはならない領域」を開くことの変奏である。

うさぎに関するエピソードは作中で三回言及されるが、母親の証言はその三回目にあたる。母親によればそれはフェリックスが七歳くらいのときだが、同じく亡き父親に対する質問では、「うさぎのことを覚えていますか？ フェリックスは九歳でした。あなたは彼に一羽の子うさぎを贈ったのですか？ 灰色の子うさぎを。」[Blaubart: 381] とある。初めてうさぎのことが言及されるのは物語が始まって間もなく、シャート自身の思い出としてである。

剃刀をあてがわれたうさぎ（ピノキオ）と、うさぎがもう生きていなかったのも幼いフェリックスが何日も泣き続けたこと。ママが彼にもう一羽のうさぎを買ってくれたが、それはもう決して、最初の灰色のうさぎほど可愛くはなかったこと。[Blaubart: 330]

亡き父と亡き母の証言の間には、「死者たちも思い違いをすることがある」[Blaubart: 384] というシャートの言葉が挿入されている。その「思い違い」は、当時のシャートの年齢に関する父と母との記憶の齟齬であるかも知れないし、シャートがうさぎを解剖したこととうさぎが死んだことと、どちらが先であったかに関するシャートと母親との記憶の齟齬かもしれない。もし母親の言うとおりのうさぎが死んだために死因を知ろうとして解剖したのだったとしても、屍体を開いたところで、幼いシャートはそこに「死」を納得させる何ものも見出さなかっただろう。「何ゆえに死んだのか」という問いに対する身体的な理由も精神的な理由も見つけられなかっただろう。ちょうど性交が、精神的な交流を伴わない純粹に身体的な運動であり、そこ



にはただ生理的な現象が付随するにすぎないと見なされたように、「心の領域」は身体から切り離されるのである。

しかしまた、母親の証言の直後に、自分の手を「殺人者の手」[Blaubart: 384]と表現していることからすれば、母親の記憶違いか、もしくは当時シャートが母親に偽りを述べたかのどちらかかもしれない。そしてもし生きているうさぎを解剖して、うさぎがもう生きていないと泣いたのだとしたら、シャートはうさぎの体を開いて、そこに何を探したのだろうか？ 幼いシャートがうさぎをかわいがっていたことが確かであり、うさぎが死んで何日も泣き続けたことも偽りない事実であるならば、シャートがうさぎを解体した動機は、うさぎへの愛以外にない。そして死後の解剖が死因を探るためであるならば、生前の解剖は、生きている理由を探すためだったのだろうか。木で作られたピノキオが動き出したように、そもそも身体が動くことが幼いシャートにとって謎であるままに、屍体となっても再び動き出すと信じたのだろうか。

ロザリンデ殺害の真犯人は、ロザリンデの客のひとり、若いギリシア人だった。彼はロザリンデの仕事の内容をもちろん知っていたが、自分だけは特別だと思っていた。しかしあるときロザリンデのところに「青いネクタイ」<sup>28</sup>を見つけて逆上したことがあった。それが自分以外の男のものだったからである。それについては他の客の証言から、一度ロザリンデの玄関ホールのコート掛けに「青いネクタイ」がかかっているのを見たことがあり、それについて冗談を言ったが、次のときにはもうそこにはなかったことが分かっている [Blaubart: 348]。犯行当日の午前中、ロザリンデは電話が何回もかかってくるのに受話器を取らなかった。それどころかコードを抜いてしまった。それはシャートがいる間に起こった [Blaubart: 397]。そして午後、おそらくはこのギリシア人がロザリンデのところにやって来たあと、五本の百合の花が届けられた。『嫉妬深い少年の歌』の少女の黄金の指輪やデズデモーナのハンカチのように、これらの「間接的証拠」は「他の男」の存在を暗示した。そのためにこのギリシア人は、睡眠薬のために半ば意識が朦朧としていたロザリンデの口を生理用ナプキンでふさぎ、両足を縛り、既に窒息していたにも拘わらず、わざわざ象徴的に「青いネクタイ」でもってその首を絞め、届けられた百合の花をその上に置いたのだった。

しかし、シャートにしても、いかに嫉妬深いとはいえ相手の女性に実際危害を加えたことはかつてなかった。このギリシア人も、いかに多くの「間接的証拠」が積み重なったにせよ、それだけでは行為に及ぶことはなかったかもしれない。アルフレッド・D・ホワイトは『青髭』において「言語的なコミュニケーションの欠落は、相互コミュニケーションへと繋がってゆかなかった」と指摘する [White: 465]。このギリシア人は、ドイツ語がほとんどできなかった。そのことが、オセローの黒い肌のように、少年の幼さのように、愛する人の殺害へと駆り立てる素地を作っていたのである。このギリシア人は、髭（青ではなく黒色の）を生やしており、

<sup>28</sup> シャートの持ち物は青色で彩られている。ネクタイも、彼の愛車ボルボも、またビリヤードに用いるチョークもみな青色である。

その意味では子供ではないのだが、彼のロザリンデに対する愛の表明は、もっぱら花を贈ることや肉体関係を持つことにあったのだろう。一方ロザリンデにとって、性交は決して人格的な共感をもたらすものではなかった。性的な関係がギリシア人とロザリンデの双方にもたらす「快樂」と、人格に関わる次元において関係を築くこととの間にある乖離は、直接体を開いて相手の中身を見ようとした幼いシャートのうさぎへの愛とその終末にどこか共通点を持っている。

尋問は、嫌疑に関わることに限定されている。たとえば子供の頃のいたずらについては誰も尋ねない。そのためにシャートももちろんそんなことを法廷で告白したりしない。尋問が始まった最初の頃に、シャートが自分の罪意識について最初に思い出したのは、一つのエピソードである。子供の頃シャートは数人の仲間と一緒に、ひとりの少年の足首を縛り、砂利採掘場に残したままにしたことがあった。その少年は三日後に発見されたが、誰に足首を縛られたのかは話さなかった [Blaubart: 317]。その人が数年前に亡くなった今となっては、シャートの「罪」は永遠に葬られた。

私は十四歳の時以来、罪がないという感情 *das Gefühl, unschuldig zu sein* を持ったことがありません。[Blaubart: 343]

一方で、十ヶ月の拘留期間中、一度も思い出さなかったことがある。たとえばあの日、ロザリンデのところを出たあと、花屋に立ち寄り、ロザリンデに百合を届けさせたことがそれである。「しかしあれはほんのいたずらでした」 [Blaubart: 399]。それは、彼女が電話に出ずにコードを抜いてしまったことで結婚当時を思い出したからであり、それまでに何度か、五本の百合がロザリンデの部屋に飾られているのを見たことがあったからであり、その見知らぬ誰かを真似て五本の百合を贈ろうと思いついたのだった。かつて他の元妻に幾度かしたように、送り人の名前を記さずに！ なぜよりによってロザリンデは両足を縛られていたのだろう。それは死因とは関係がなかった。そして縛ったのは確かにシャートではなかったにせよ、シャートは罪を問われないうちままとった子供の頃のいたずらを思い出さずにはいられなかった。デズデモナーの死にイアーゴに罪があるとすれば、それと同じ意味において、シャートはロザリンデの死に関して、「罪がない／責任がない *unschuldig*」という感情をもてなかったのである。

犯行当日のこの出来事は、拘留期間中、シャートの記憶から抜け落ちてしまっていた。森を散策しているときに突然、思い出したのだった。そしてシャートは、故郷に出かけ、かつてのいたずらの犯行現場である砂利採掘場を訪れたあと、出頭する。「ロザリンデ殺害に関して、自分が実行犯である」 [Blaubart: 400] と名乗り出たシャートは、しかし間もなく釈放される。既にギリシア人が真犯人として逮捕されたあとだったのである。

## ・「光のなかで」

数々の間接的証拠が、ありとあらゆる推測を喚起する。あるいは「自己信頼の欠如」が病的なまでの嫉妬を引き起こす。しかしシャートは嫉妬心から解放されたはずだった。嫉妬心や猜疑心を克服したあとには、真の愛が生まれるとプシューケーの物語は教えていた。「愛し始めるまでは、友人でいられる。愛が終わったあと、友人になれる」、そのことをフリッシュはこれまで描いてきた。しかし押収された物品を引き取ったシャートが、その中にあったたくさんのロザリンデの写真を眺めるとき、被害者への問いが噴き出すのである。

—あなたは彼を友人と受けとめていたと、そう彼は思っていますが…… [Blaubart: 393]

—あなたとフェリックス・シャートとの関係がもはや性的な関係にはならなくなってからは、あなた方の関係はあくまでも友人同士の、それどころか調和的なものになったと、あなたも認めますか？ [Blaubart: 394]

これらの質問はシャートの自問であり、その問いを発するために死者たちは呼び出される。そのように死者たちを秘めていた場所、死者たちに滞留する場を提供し呼び出されることを可能にするのが外ならぬシャートの記憶であり、それが、殺された青髭の妻たちを隠していた「秘密の小部屋」に相当する。「ひとつの生が展開するなかで、女性であれ友人であれ、多くの人間が記憶のなかに im Gedächtnis 沈降してゆく」[Hage: 231]。それはシャートの住居にも診療所にも見つけられない小部屋であり、またシャート自身を解剖したところで、その脳髄にも心臓にも決して発見されることのない、死者たちが死してなお有ることのできる場であり、おそらくはシャート自身の死と共に決定的に失われてゆく場なのである<sup>29</sup>。

呼び出された死者は、写真の中のロザリンデと同様、微笑むばかりで答えることはない。そうして彼らの関係、嫉妬から解放されたあとの「調和的」でさえある関係は、あくまでもシャートの思い込みであったかも知れず、自己確認のために女性としての成果を必要としていたロザリンデに「自己信頼」を補償してくれるものであったかどうかは分からない。シャートが去ったあと、真昼に睡眠薬を飲むロザリンデの心の中は「不可解な謎」のままである。元妻たちの証言を挙げながら時おりシャートはその声の主の区別がつかなくなるのだが（「これはアンドレアだったかもしれない」[Blaubart: 364]「これはコリンだ。それともアンドレア？」[Blaubart: 366]）、元妻たちが個別性をなくしてゆくにつれて「妻たち Frauen」は「女たち Frauen」の総称となり、やがてひとりの女、ロザリンデに集約されてゆく。ロザリンデが特

29 ハーゲとの対談のなかでフリッシュは年齢と共に衰えてゆく記憶力に触れている。作中には「おちおちメモも残しておけない」という言葉もあるが、メモをとらなければすぐ忘れてしまうようになったと [Hage: 230f.]。「老いること」は「ガンテンバイン」以来主要なテーマのひとつであるが、ここではシャートが五十四歳であること、ロザリンデと離婚した頃ロザリンデは三十代の初めであり [Blaubart: 378]、現在の妻が三十六歳であることなど [Blaubart: 371]、妻たちとの年齢差によって間接的に暗示されるのみである。

別であるのは、現在の妻ユッタが今や他の男性との恋愛関係にあり、ほとんど「元妻たち」の一人になりつつあるからであり、それに比べてロザリンデは、「死者である」という点で唯一独自性を獲得したからである。そうして「女たち」の総称であるロザリンデの姿自体が、永遠の沈黙に包まれた「不可解な謎」として描かれるのである。

—あなたが野の道と呼ぶのはどういうものですか？

—それは必ずしも初めから見えるものではありません、最初のうちはよい道で、ずいぶん広がったりしますが、ところどころ砂利の上を歩くこともあります。しばらくするともう砂利はなくなりますが、依然として道の形態をとっています。倒木の間を通ることもあります。幹の皮は剥がれていなかったと思います。そして突然、空き地 *Lichtung* に出ます。そこにあるのはせいぜいブルドーザーの深い轍くらいです。泥のなかにカーブが残っています。それ以外は下生えです。[Blaubart: 320]

元妻の一人の証言にあるように、元々シャートは何時間も誰にも見られずに、ひとりで森を散策することを好んでいた。逮捕された当初、狼狽したシャートは、犯行推定当時、自分は白鳥にえさをやっていた、あるいは森を散策していた、と主張した。いずれもひとりきりの行動であったため確証されず、しかも何度も主張を変えたために却って嫌疑を強めることとなった。検事らしき声が「野の道」について尋問したところで、アリバイという点では何の役にも立たない。むしろこの記述は、ハイデガーの「真理」概念を連想させるがゆえに重要なのである。

フリッシュの作品におけるハイデガーの思想の影響については、早くから先行文献があるが、フリッシュがハイデガー思想と関わるようになったのは、彼の恋人であったインゲボルク・バッハマンの博士論文がハイデガー論だったことに端を発すると言われている。*Lichtung* という術語は早くには『存在と時間』*Sein und Zeit* (1927)にあるが、さらに大きくその概念を展開させたのは「芸術作品の根源について」*Der Ursprung des Kunstwerkes* (1935/36) という論考においてである。そしてそれが収録されたのが、『野の道』*Holzwege* (1935) という論集だった。

「空き地」とは本来、嵐などによって木々が倒れて森のただ中に生じた空き地である。深い森を散策するうちに、突然、ぽっかりと木のない空間が開けることがある。そこには地面にまで太陽の光が届いている。うっそうとした森のただ中に出現する光の降り注ぐ場所をハイデガーは、真理（アレーティア）が顕現する場の比喩とした。存在するものは、覆い隠されていた状態を抜け出て光のなかへと現れ出る *wesen*。それはその本質 *das Wesen* が現れることなのであると。ギリシア語の「アレーティア」は、ドイツ語で「真理 *Wahrheit*」と訳されてきたが、ハイデガーによれば本来は、「存在するものの非被覆性 *die Unverborgenheit des*

Seienden」を意味する。存在するものが覆われていない、隠されていないという意味である。「アレーティア」を、真理という言葉から非被覆性という言葉に訳し戻すことによって、「覆われている－覆われていない」という観点が導入される。存在するものが覆われているとは、その本質が現れ出ていないという状態であるが、存在するものは、真理を問うことによって初めて真理へと向かうのであり、それによって真理が生起することを可能にする。その意味では当初のこの覆われた状態は、いかなる開示／明らかさ Offenbarkeit にもまして原初的な状態であり、真理の本質の一部をなしているのである [Heidegger (1943): 191]。

真理とは、ある言明と事実とが一致することではない。それはその言明が事実在即していることを意味しても、真理はそうした一致に尽きるものではない。存在するものが存在するということが、それが本来の仕方であるということ、そこから真理とは何かが問われるのである。そして真理とは何かという問いは、真理の本質を「アレーティア」として考えるように促す。真理こそは何にもまして問われるべきもの fragwürdiger であり、かつ、考えられていないままであり続けており、そのため「もっとも覆い隠されたもの das Verborgenste」であるのである [Heidegger (1935/36): 38]。

ここにおいて我々は、フリッシュの『青髭』が隠し持っていたもう一つのパロディーを知る。フリッシュは、体を解剖しても、日記や手紙をすべて暴露して私生活の隅々にいたるまで探しても見つからなかった秘密、もっとも隠された秘密を森のなかにも、それも開かれた光のなかにおく。森を散策しているとき、ようやくシャートは、自分こそがロザリンデ殺害の犯人であるという「真理であり紛れもない真理 die Wahrheit und nichts als die Wahrheit」 [Blaubart: 402] に辿りついたのだが、警察にとってその供述は事実在即していないものであり「間違った」ものでしかない [Blaubart: 403]。しかしまた、シャートが過去の行為に関する罪意識に堪えかねて出頭したと捉えるのは正確ではないだろう。生きることに伴って増大し蓄積する罪意識に相応する行為を、事後的に求めたというだけでは十分ではない。ロザリンデは、殺されたことによって初めてシャートにとって唯一特別な存在になったのであれば、その殺害者の役割を引き受けることが、ロザリンデにとってもシャートが唯一無二の存在となる唯一の方法であっただろう。愛の神を三途の川さえも懼れると、プシューケーの話は伝えていた。夫婦としては失敗し、男と女の友人関係としても一方的でしかなかった二人が、殺害者と被害者として、双方にとって、他の誰とも交換不可能な関係項となりうる。それこそは、ひとつの完全な関係であったかもしれなかった。そのようにしてロザリンデとの関係を事後的に完成させようという試みはしかし、またもや失敗する。それは真犯人が既に逮捕されたからというだけではない。「あとはもう散策するしかない」と述べたあと、しばらくしてシャートは言う、「もちろん散策したところで何にもならない」と [Blaubart: 400]。

—シャートさん、あなたが昨日警察におっしゃったことは、残念ながら事実ではありませ

ん。あなたは徒歩でラーツヴィル方面へ散策したとおっしゃいましたが。残念ながら！  
もしそうであればあなたは今頃この病院で横たわってはいなかったでしょう。

—いいえ……。

—あなたは一本の木に激突したのです。

— [……]

—それにそもそも道路だって滑りやすくなっていますませんでした。濡れてさえいませんでした。シャートさん、それも間違っています。アスファルトの上には一枚の葉だって落ちていませんでした。今は夏です。あなたが目を開けさえすれば、開いた窓の外に緑色の葉を見ることができますよ。[Blaubart: 399f.]

森を散策していると思っていたシャートは、実際にはほとんど自殺まがいの行為の結果、病院のベッドに意識不明の状態で横たわっていたのだった。そのシャートの「真実」は、まさに薄れてゆく意識のなかで、死にもっとも接近する。もっとも隠されたもの、もっとも考えられなかった真理をこのような形でフリッシュは、死と結びつけたのである。

我々はこの結末からフリッシュにとってのハイデガー思想を論じるべきだろうか。ハイデガーは、真理は作品において現れるといった。ではこの『青髭』という作品は、そうした作品でありえているだろうか。ハイデガーが提起した問題は、人間であることの本質が、言語能力と死ぬという能力にあるということであると、ジョルジュ・アガンベンが述べた。最後には「野の道を避けて」、車で一本の木に激突したシャートが辿りついた場所は、それでも空き地を代理的に提供してくれただろうか。考えられるべきでありながらついぞ考えられなかったこと、ついぞ語られなかったことは、その謎を抱えた人の死と共に永遠の謎となる。シャートが、自分には語らないままに終わらせたことがあると誰かに伝えることができたなら、再び「秘密の小部屋」は構成されるだろう。それはきわめて私的な、シャート以外のほとんど誰にも関わりを持たないほど極私的な事柄であったかも知れない。ただそういう秘密があったということだけを伝えられたとしたら、言葉と死とを、フリッシュなりの仕方でもパロディー化することに成功したと言えるだろう。

キーワード：妻殺し、青髭、マックス・フリッシュ、法廷劇、罪責感

### 欧文文献

文中で引用した個所については、原文のページ数を示したあと、邦訳のあるものについては括弧内に記した。ただし、訳語の統一という観点から、また文脈に応じて適宜訳語を改めた。

Agamben, Giorgio (1982): *Die Sprache und der Tod: ein Seminar über den Ort der Negativität*, aus dem

- Italienischen von Andreas Hiepko, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2007.
- Balázs, Béla (1952): *Herzog Blaubarts Burg: Oper in einem Akt*. Musik von Béla Bartók [Bluebeard's castle : opera in one act] y Béla Bartók, 1963. Wien (von Füssl/Wagner) 1963.
- Barz, Helmut (1987): *Blaubart: Wenn einer vernichtet, was er liebt*. Zürich (Kreuz Verlag) 1987. (『青髭——愛する女性を殺すとは?』林道義訳、新曜社 1992年。)
- Brentano, Clemens/Arnim, von Achim (1806): Der eifersüchtige Knabe. (aus *Des Knaben Wunderhorn. Alte deutsche Lieder gesammelt von L. A. v. Arnim und Clemens Brentano*). In: Rölleke, Heinz (Hrsg.): *Sämtliche Werke und Briefe*, Bd. 6, Stuttgart/ Berlin/ Köln/ Mainz (Verlag W. Kohlhammer) 1975, Historisch-kritische Ausgabe, S. 275-276. Kommentar in Bd. 9-1, S. 485-487.
- Brüder Grimm (1812): Blaubart. In: Rölleke, Heinz (Hrsg.): *Kinder- und Hausmärchen*, mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen in 3 Bänden, Philipp Reclam jun. Stuttgart 1980, 2. Bd., S. 465-468, Nachweise 3. Bd., S. 526. (『完訳グリム童話集2』金田鬼一訳、岩波文庫 1979年、64-70頁。『1812初版グリム童話』(上) 乾侑美子訳、小学館文庫 2000年、335-341頁。訳は後者を用いた。)
- Bulfinch, Thomas (1855): *The Age of Fable: Or, Stories of Gods and Heros*. Boston 1855. (『完訳ギリシア・ローマ神話——伝説の時代』大久保博訳、角川文庫 1998 [1970]年。)
- Frisch, Max (1953): *Rip van Winkle. Hörspiel*. In: Hans Mayer (Hrsg.): *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge in sieben Bänden*. Frankfurt am Main (Suhrkamp Verlag) Band III, S. 781-835. [Rip]
- (1954): *Stiller*. In: Band III, S. 359-780. [Stiller] (『ほくはシュティラーではない』中野孝次訳、白水社 1970年。ただしこれは実際には抄訳である。)
- (1981/82): Blaubart. Eine Erzählung. In: a.a.O., Band VII, 1986, S. 301-403. [Blaubart]
- Hage, Volker (2011): Volker Hage im Gespräch mit Max Frisch, In: *Max Frisch. Sein Leben in Bildern und Texten herausgegeben von Volker Hage*, Frankfurt am Main (Suhrkamp Verlag) 2011, S. 213-244.
- Heidegger, Martin (1935/36): *Der Ursprung des Kunstwerkes*. In: *Gesamtausgabe I. Abteilung. Veröffentlichte Schriften 1914-1970*, Bd. 5 *Holzwege*. Frankfurt am Main 1977. (『芸術作品の起源』茅野良男/ハンス・ブロッカルト訳、『ハイデガー全集第五巻 拙道』創文社 1985年、5-95頁。)
- (1943): Vom Wesen der Wahrheit. In: *Wegmarken*. Zweite, erweiterte und durchgesehene Auflage, Frankfurt am Main (Vittorio Klostermann) 1978, S. 175-199.
- Herder, Johann Gottfried (1778): Ulrich und Ännchen (aus *Volkslieder*). In: Gaier, Ulrich (Hrsg.): *Werke in zehn Bänden*, Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1990, Bd. 3, S. 106-107, Stellenkommentar: S. 989.
- Janosch (1991): *Janosch erzählt Grimm's Märchen: vierundfünfzig ausgewählte Märchen, neu erzählt für Kinder von heute mit farbigen Bildern von Janosch selbst*. (『大人のためのグリム童話』池田香代子訳、宝島社文庫 1999年。)
- Janßen, Karl-Heinz/Tobias, Fritz (1994): *Der Sturz der Generäle. Hitler und die Blomberg-Fritsch-Krise 1938*. München (Sämtliche Abbildungen Süddeutscher Verlag).
- Kohlschmidt, Werner (1978): Selbstrechenschaft und Schuldbewußtsein im Menschenbild der Gegenwartsdichtung. Eine Interpretation des »Stiller« von Max Frisch und der »Panne« von Friedrich Dürrenmatt. In: Walter Schmitz (Hrsg.): *Materialien zu Max Frisch »Stiller«*. Frankfurt am Main 1978, S. 180-194.
- Tieck, Ludwig (1799): Der Blaubart. In: Manfred Frank u.a. (Hrsg.): *Schriften in zwölf Bänden*, Band VI, Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1985, S. 394-487, Redaktion der Erstfassung S. 1346-1377.
- White, Alfred D. (1986): Max Frisch revisited: "Blaubart", in: *Monatshefte*, Vol. 78, No. 4 (Winter, 1986), pp. 456-467.
- Ziolkowski, Theodore (1997): *The Mirror of Justice: Literary Reflections of Legal Crises*. Princeton (Princeton U. P.) 1997.

## 日本語文献

- アーブレイユス『黄金の驢馬』呉茂一・国原吉之助訳、岩波文庫 2013年。  
オウイディウス『変身物語』(上) 中村善也訳、岩波文庫 1986 [1981] 年。  
立木康介『露出せよ、と現代文明は言う——「心の闇」の喪失と精神分析』、河出書房新社 2013年。  
中村靖子『「妻殺し」の夢を見る夫たち——ドイツ・ロマン派から辿る〈死の欲動〉の生態学』、松籟社 2013年。  
ハインツ・ヘーネ『髑髏の結社 SS の歴史』(上・下) 森亮一訳、講談社学術文庫 2001年。  
シャルル・ペロー (1697) 『完訳 ペロー童話集』新倉朗子訳、岩波文庫 2003 [1982] 年。



**Abstract**

„Freispruch mangels Beweis“:  
Das Erwachen aus dem Traum vom Mord an der Frau

YASUKO NAKAMURA\*

*Blaubart* (1982) ist das letzte literarische Werk von Max Frisch. Das Motiv des Frauenmords, den die Protagonisten in *Stiller* (1954) und *Rip van Winkle* (1953) behaupten begangen zu haben, bleibt also bei Frisch bis zum Ende seines Schaffens ein Hauptthema. Der Blaubart-Stoff stammt aus einem Märchen Perraults und wurde auch in die erste Ausgabe von Grimms Märchen aufgenommen. Das Neugier-Verbot taucht, wie Perrault zutreffend feststellt, schon in der Geschichte von Amor und Psyche bei Apuleius auf. Die Vielzahl und die Willkürlichkeit, mit der Gilles de Rais, das Modell für Blaubart, bei der Wahl der Opfer verfuhr, übernahm das Volkslied *Ulrich und Ännchen*. Das Eifersuchtsmotiv tritt erst in Herders *Lied des eifersüchtigen Knaben* in den Vordergrund, in dem ein goldener Ring an dem Finger des geliebten Mädchens wie Desdemonas Taschentuch den Verdacht des Knaben weckt. Seine unbegründete Eifersucht verleitet ihn schließlich zum Mord an dem Mädchen. Diese verschiedenen Motive waren mit dem Blaubart-Stoff verknüpft, den Frisch seiner Erzählung unterlegte.

Stiller wird wegen einer Ohrfeige verhaftet und behauptet dann im Gefängnis, seine Frau ermordet zu haben. Er wird deswegen jedoch nicht angeklagt, sondern zuletzt wegen des ursprünglichen Tatbestandes verurteilt. Während seine Aufzeichnungen mit der Verurteilung enden, beginnt in *Blaubart* die Erzählung von Dr. Schaad mit dessen Freispruch. Rosalinde, eine seiner Ex-Frauen, war ermordet worden, und am Tatort hatte man seine blaue Krawatte gefunden. Der Text stellt eine innerseelische Wiederholung der Gerichtsverhandlung nach dem Freispruch dar, gibt die Befragungen und Zeugenaussagen wieder, bald beim Wandern im Wald oder beim Billard-Spiel, bald in einer Bar oder in seiner Arzt-Praxis. Schaad unternimmt keinen Versuch, sein früheres Leben wieder aufzunehmen, so als halte er das gar nicht mehr für möglich. Er schreibt selbst an den Entlastungszeugen keinen Brief und verkauft seine Praxis. Ohne Richter oder Zeugen lebt er ganz allein mit sich und den Stimmen der Prozessteilnehmer, die er vernimmt. Sein alltägliches Leben nimmt vollständig die Gestalt eines inneren Gerichts an.

In diesem Werk ist also nicht nur der Blaubart-Komplex verarbeitet, sondern auch das seit Kafkas *Prozess* bekannte Gerichts-Motiv. Über Rosalinde als Prostituierte sagt Frischs Dr. Schaad einmal, sie sei keine Nymphomanin gewesen. Die Verteidigung klingt aus seinem Munde recht unangebracht, insofern er als der Angeklagte, dessen Spitzname nicht von ungefähr „Ritter Blaubart“ ist, doch viel eher selbst als abnormal oder pervers anzusehen wäre. Offenbar will er damit andeuten, dass dies keineswegs der Fall sei. In der Tat bezeichnen manche Zeugen ihn als „ritterlich“ und sagen, er sei „ein Mensch, der keiner Fliege auch nur ein Bein krümmen könnte“, obwohl nicht nur seine maßlose, manchmal grundlose Eifersucht in seinem ganzen Freundeskreis bekannt ist, sondern sogar eine Notiz gefunden wurde, worauf zu lesen war, dass er Rosalinde erwürgen wolle, von anderen Indizien ganz abgesehen. So wird eine große Kluft zwischen seinen heftigen Eifersuchtsgefühlen und der schließlich vollbrachten Tat sichtbar.

Schaad glaubt, dass Mann und Frau vor und nach der Liebe Freunde sein können. Er behauptet, von seiner Eifersucht endlich befreit worden zu sein, als er die Gelegenheit hatte, Rosalinde mit ihren Kunden auf einem Video zu beobachten. Dadurch habe er erfahren, dass dieser Geschlechtsakt für sie „nichts mit persönlicher Sympathie zu tun hatte“. — Es handelt es sich hierbei um eine Variante der verbotenen Kammer, nur dass der Beobachter der Mann ist und dass er statt der Leichen der Exfrauen den Geschlechtsverkehr seiner Exfrau mit

\* Für die Durchsicht der deutschen Fassung danke ich herzlich Hans Michael Schlarb (Universität Hiroshima).

anderen Männern mitansieht. Bei Apuleius verschwindet Geliebter Amor (Eros), als Psyche sein Gesicht beim Lampenlicht erblickt. Schaad dagegen wird, als er die Prostitutionsszene am Bildschirm verfolgt, von seinen „Vermutungen“ befreit.

Die Kaninchen-Episode ist eine Variante des Öffnungs-Verbots. Das graue Kaninchen unter dem Rasiermesser gehört zu den Erlebnissen aus Schaads Kindheit, an die er sich bei seiner Verhaftung erinnert. Laut „Aussage“ seiner toten Mutter — bei seinem inneren Gericht melden sich auch Tote zu Wort — hatte er wissen wollen, woran es gestorben war. Aber mit den Worten: „auch Tote können sich irren“, weist er ihre Erklärung zurück, denn für ihn verhielt es sich genau umgekehrt: Nicht um die Todesursache des Kaninchens ging es ihm, sondern er hatte es „aufmachen“ wollen, um zu sehen, wie es kommen konnte, dass sich der zuvor so lebendige Körper nicht mehr bewegte; auch wollte er wissen, ob das Tier, das er so sehr liebte, seinerseits auch ihn geliebt hatte — schließlich hatte er es ja „Pinocchio“ genannt. Dahinter versteckt sich die alte Moral von Blaubart: Man soll nicht zu neugierig sein, da man doch nirgends im Leib die Quelle der Liebe finden kann. Als Bezirk des Geheimnisses erregt die verbotene Kammer immer wieder Neugier. Für den Körper gilt das Gleiche, nicht nur in sexueller Hinsicht. Dagegen wird die Stelle der verbotenen Kammer nunmehr vom Gedächtnis eingenommen, das die Toten zum Verhör in den inneren Gerichtssaal zitiert.

Im Verlauf des inneren Prozesses wird manches Neue klar: Schaads jetzige Frau hat eine Affäre mit einem anderen Mann und ist zur Scheidung entschlossen. In diesem Sinne gehört sie schon zu den Exfrauen., die Schaad zudem miteinander verwechselt, da sie für ihn ihre Persönlichkeit und Unterscheidbarkeit weitgehend verloren haben — eine Abmilderung des Blaubartgeschehens wie in dem oben genannten Volkslied. Rosalinde als Tote bzw. Ermordete besitzt dagegen Einmaligkeit. Einmal fragt sich Schaad, ob auch für sie ihre Beziehung nach der Scheidung eine, wie er sich ausdrückt, „kameradschaftliche“ und „harmonische“ gewesen sei. Die Frage wird nun für immer offen bleiben. Da Schaad schon seit seiner Kindheit stark unter Schuldgefühlen leidet, geht er schließlich abermals zur Polizei, um ein Geständnis abzulegen, diesmal aber in seiner Heimat. Sein Bekenntnis zur Mordtat wird jedoch von der Polizei, also in der Öffentlichkeit, als unzutreffend angesehen und Schaad sogleich wieder freigelassen. Als eigentlicher Täter war schon ein Grieche verhaftet worden. Er kann kein Deutsch und konnte also auch mit Rosalinde sprachlich nicht kommunizieren. Für ihn war die blaue Krawatte, die zu Beginn den Verdacht der Polizei auf Schaad gelenkt hatte, das Indiz für einen anderen Mann, das seine Eifersucht entfachte und ihn den Mord an Rosalinde begehen ließ — vergleichbar mit Desdemonas Taschentuch oder dem goldenen Ring im *Lied des eifersüchtigen Knaben*. Schaad ist letzten Endes also auch daran gescheitert, sich gegenüber Rosalinde in ein Täter-Opfer-Verhältnis zu bringen und so ein unersetzbares Korrelat in der Beziehung mit seiner Exfrau zu werden.

Frisch hat in seinen Text Zitate verschiedenster Art aus seinen früheren Werken, aus eigenen Träumen und autobiografischen Tatsachen hinein montiert, sei es als Formulierung, sei es als Episode, oder indem er die Struktur der menschlichen Beziehungen übernahm. Auch das Eifersuchtsthema hatte er schon so häufig behandelt, dass er den Text einmal selbstironisch ein „Selbstplagiat“ nannte. Und dem Gerichtsschwur, „nur die Wahrheit und nichts als die Wahrheit zu sagen“, stellt er den Wahrheitsbegriff von Heideggers „Lichtung“ parodierend gegenüber. Denn Schaad kommt es im Halbschlaf nur so vor, als ob er im Wald wandere; in Wirklichkeit liegt er im Krankenhaus. Wie er am Ende zu Heideggers Wahrheit nicht gelangt, so ist er auch in seinem Leben gescheitert, zuletzt mit seinem Selbstmord. Ihm bliebe nur übrig, zu tun, wozu eine Stimme ihn wiederholt auffordert, und die Augen „auf-“ (nicht „zu-“) zu machen, um sich der Wirklichkeit nicht zu verschließen. Frischs Blaubart-Erzählung endet mit Schaads Weigerung, seiner verfehlten Art von Selbstbewahrung.

Keywords: Frauen-Mord, Dirnenmord, Blaubart, Max Frisch, Gerichts-drama, Schuldgefühl